

# 新しくもの糸

芥川龍之介「蜘蛛の糸」より

森本ジュンジ

(人物)

蜘蛛  
一市  
源宋  
惠蓮  
ヨシ秀  
十郎  
座長  
ビリ

―複数配役―

人生の何たるかを見つけられなかった老人

報われぬ労働者

栄華を誇った元貴族

一つの真理を求める数学者

ハル坊

ハル坊の母

青年のハル坊

・平太夫の家来

老師

・村の長

沙弥

・小僧

アリオ

・受領

タロー

・小役人

ゴン助

・公家(遥任国司)

黙念

・地獄の住人

珍念

・地獄の住人

平太夫

・地獄の住人

見世物小屋の座員1

・地獄の住人

見世物小屋の座員2

・地獄の住人

見世物小屋の座員3

・遊女

見世物小屋の座員4

・地獄の住人

見世物小屋の座員5

・首斬役人

見世物小屋の座員6

・地獄の住人

見世物小屋の座員7

・首斬役人

見世物小屋の座員8

・地獄の住人

見世物小屋の座員9

・遊女

見世物小屋の座員10

・地獄の住人

見世物小屋の座員1

・平太夫の家来

見世物小屋の座員2

・地獄の住人

見世物小屋の座員3

・平太夫の家来

見世物小屋の座員4

・地獄の住人

見世物小屋の座員5

・平太夫の家来

見世物小屋の座員6

・地獄の住人

見世物小屋の座員7

・平太夫の家来

見世物小屋の座員8

・地獄の住人

見世物小屋の座員9

・平太夫の家来

見世物小屋の座員10

・地獄の住人

見世物小屋の座員1

・平太夫の家来

見世物小屋の座員2

・地獄の住人

見世物小屋の座員3

・平太夫の家来

見世物小屋の座員4

・地獄の住人

見世物小屋の座員5

・平太夫の家来

見世物小屋の座員6

・地獄の住人

見世物小屋の座員7

・平太夫の家来

見世物小屋の座員8

・地獄の住人

見世物小屋の座員9

・平太夫の家来

見世物小屋の座員10

・地獄の住人

見世物小屋の座員1

・平太夫の家来

見世物小屋の座員2

・地獄の住人

見世物小屋の座員3

・平太夫の家来

亡者たち

(舞台装置)

装置を排したオープンステージ。

中央に登場人物が入りできる仕掛け穴あり。

※衣装は、着物、髷まげに限らず。和のテイストを残したMODERNであれば尚良しとする。

※作品上演には歌舞伎等のそれと同様、全編通し上演に限らず、幕ごとなど分割上演も可とする。

※(1)※

一人の僧が浮かび上がる。

法名を一市いちという。

一市 「ここへ来てしばらくになりますが、およそ苦しみというものを味わったことがございませぬ。それは喜びに満ち溢れた世界で、自然と体中から楽しさが沸き起り、絶えず新鮮な嬉しさが生まれ出ます。木々や草、小鳥に至るまで、みんな楽しそうに穏やかな陽の光を浴びて、笑ったり、あくびをしたり、飛び回ったりしているのです。

それがここ、極楽というところでございます」

一市、ゆっくり円を描くよう歩き出す。

一市 「ある日のことでございます。沙羅双樹の林を抜けて、琥珀の山へ向かってみようと私は一人歩いておりました。すると、どこからか風に揺られてきたのでございましょう。行く手から何ともいえぬよい匂いのしてきたことに気がついたのでございます」

笛の音、I N。

一市 「桃のような白檀のような、はたまたシャボンのような匂いは、心持ちまで安らかにするような心地よいものでございます。私はすぐにハッとしました。この匂いに心当たりがあつたからです。この一瞬で心を解き放ち、人を虜にする高貴な魅力の持ち主。(襟元を正し)それは、あの御方において他にはないと。あの御方…すなわち御釈迦様が」

太鼓の音、混じりだす。

一市 「導かれるように匂いの先へと私は足を進めました。半刻も歩いたでしょうか。林を抜け出た野の中に、ある池がございました。そこには一面、真っ白な蓮の花が咲き誇り、金色の蕊すいは光り輝いておりました。そうです。これが、かの有名な極楽の蓮の池だったのでございます」

一市の歩く円に明かりが当たる。

一市 「所謂ここは一つの聖地です。あの御方が朝な夕なと御歩きになられ、時には座禅されることすらあるという真まことに灼あつたかな場所でございます。私はまだあの御方に御目にかかったことがございません。いつもあと少しのところで行き違いとなり、御噂を耳にすることだけが常になつております。それは、この日もそうでした。池の周りをいくから見回しても、もはやあの御方の御姿はどこにもございません。ただ水面をかすめる柔らかな風と残り香だけが清々と漂うばかりで」

蜘蛛、登場。

池の傍に落ち着き、糸紡ぎ機を回す。

一市 「穏やかな静寂に包まれたこの場所で、私はそれでも、あの御方の影を尊び、満たされた気持ちを感じずにはおられませんでした。私は僧侶です。いつも行き違いとなり、未だあの御方に御目にかかったことはございませんが、それでも…」

蜘蛛 「あなたでしたか」  
一市 「(蜘蛛に気づき) あの…」  
蜘蛛 「お名前は確か、一市。お坊さんでしたね」  
一市 「あなた…」  
蜘蛛 「蜘蛛です。銀の糸を出す、あの蜘蛛です」  
一市 「私、以前どこかで」  
蜘蛛 「いいえ」  
一市 「けれど、あなたは今、私を見てあなたでしたかと」  
蜘蛛 「ええ。知っていましたから」  
一市 「私を」  
蜘蛛 「そうじゃありません。あなたのことは知りませんよ。あなたがここに来ることを知っていたんです」  
一市 「それはどういう」  
蜘蛛 「あの御方が、そう仰いました」  
一市 「あの御方。やはり、こちらにあの御方が」  
蜘蛛 「あの御方は仰いましたよ。あなたがここへやって来るってね。だから、私は待ったんです。もう随分になります」  
一市 「あの御方が私のことを」  
蜘蛛 「もっとうさん臭い人かと思ってた」  
一市 「(不安気) あの御方がそんな風に仰ったんですか」  
蜘蛛 「あの御方は何も。ただね、来るって。そして、話せと」  
一市 「何をです」  
蜘蛛 「これからあなたが行く場所を」  
一市 「行くんですか。どこかに、私」  
蜘蛛 「正確には行くかもしれない」  
一市 「どういうことです」  
蜘蛛 「あの御方がそう仰ってました。あなたは行くかもしれない。けれど、行かないかもしれないってね。だから、私から尋ねてみてくれて」  
一市 「何故です」  
蜘蛛 「はい…」  
一市 「どうして私が行かないなんて。そんなこと、あの御方は」  
蜘蛛 「ああ、良心の問題です。それは」  
一市 「良心」  
蜘蛛 「慈悲深さといってもいいかもしれない」  
一市 「一寸、待って下さい」  
蜘蛛 「何です」  
一市 「私は行きますよ。どこへだってね。だってあの御方の御言いつけなんですから。私はそういう人間です。あの御方を、その…心から御慕えしてるんです。御慕えですよ。私は僧侶なんです。それなのに、どうして良心やら慈悲深さなんて…。まさか御疑いになっておられるわけじゃ」

蜘蛛 「あの御方が」  
一市 「先刻だって、その…私をうさん臭い男だなんて…」  
蜘蛛 「いえ、それは私が勝手に」  
一市 「でも、あなたは想像してたんでしょ。あの御方の話を聞いて私がうさん臭いって」  
蜘蛛 「それは行く場所が、場所だからです。私はそういう意味で」  
一市 「どんな所にしたってです」  
蜘蛛 「そうですか」  
一市 「私は僧侶ですよ。生きてる間はあの御方の教えをね、広めたんです。とつても広めました。あの御方だって御存知のはずです。それなのに…」  
蜘蛛 「気に入らないのなら、やめときますか」  
一市 「そういう事を言ってるんじゃない。私は御慕えしてるんですから」  
蜘蛛 「じゃ、行くんですね」  
一市 「もちろんですよ。しかも喜んで。一寸、引っ掛かっただけで。あんまり水臭いことを仰るから」  
蜘蛛 「少し、遠いですよ」  
一市 「構いませんよ、いくらだって。どこなんです」  
蜘蛛 「そう…言ってみれば、人探しです」  
一市 「ああ、いいですね。探すんですか」  
蜘蛛 「男を一人」  
一市 「どんな人です」  
蜘蛛 「しくじった男をね」  
一市 「ほう、気の毒に」  
蜘蛛 「ええ。その男はしくじったんです。ここへ来るのにね、一度」  
一市 「この場所へ」  
蜘蛛 「はい。この池の上に」  
一市 「池の上…」  
蜘蛛 「ええ。彼は下にいますから」  
一市 「下って」  
蜘蛛 「だからこの底」  
一市 「(池をちらと覗き)…」  
蜘蛛 「地獄です」  
乾いた風の音(笛)。  
蜘蛛 「韃陀多という男をね、探して欲しいんだそうです」  
一市 「あの…地獄にいるんですか。その人」  
蜘蛛 「ええ。罪人ですから」  
一市 「罪人…」  
蜘蛛 「何でも、放火や殺しをね」  
一市 「その…見つけてどうするんです」  
蜘蛛 「連れて来るんです。ここへ。極楽にね。その男には資格がありますから。助けたんです。昔、一匹の蜘蛛をね。踏み潰そうとしたそれを、生かしてやりました。」

あの御方はそれを御思い出しになられて、ここへ連れて来てやろうと御考えになったのです。けれど、その男はしくじりました」

「何故です…」

蜘蛛 「切れたんです。糸がね。あの御方が私を使って垂らしてやった糸が切れました。ここへ上ってくる途中。ぷつぷつりと」

「あの…」

「何です」

蜘蛛 「ホントに間違いありませんか…」

「は」

蜘蛛 「ですから、あの御方が地獄へ行けと仰ったのは本当に私なんですか…」

「あなたです」

「でもね…」

蜘蛛 「私もあなたと話して、ふさわしい人だと」

「だから、それはどういう意味で」

蜘蛛 「(御守袋を出し)「これをお持ちなさい」

「答えなさいよ」

蜘蛛 「地獄は濃い霧のまだ下。暗くて底まで見えません。犍陀多を探し出したら、その中に入っている阿弥陀様の御像を出しなさい。今は開けちゃいけませんよ。とっても眩しいですからね。金で出来てます。それなら、ここへだって光が。それが合図です」

「合図」

蜘蛛 「私が糸をおろす」

一市 「もし、光が届かなかったら」

蜘蛛 「そんなこと」

一市 「いや、しかし」

蜘蛛 「あの御方はそう仰らなかつた」

一市 「でも、こんなに小さいですよ」

蜘蛛 「それなら大きな声で呼びなさい。私、ずっと耳をすましています」

一市 「そんな、声なんかで」

蜘蛛 「大丈夫。私、地獄耳ですから。あ、洒落ちやつた」

一市 一市、御守袋を置く。

「とりあえず、お返しします…」

蜘蛛 「持たないでどうするんです」

一市 「とりあえずです」

蜘蛛 「とりあえずって、何です」

一市 「だって、おかしいじゃないませんか。第一、私、泳げません…」

蜘蛛 「泳ぐ必要なんてありませんよ。あつという間ですから。地獄へ落ちるなんてことは、あなた」

「でもです」

蜘蛛 「先刻も言ったでしょ。水の下はね、霧なんです。近づいてよく御覧なさい」

一市 「(ちらとだけ見て) やっぱりだ。ずっと水ですよ、これ」  
蜘蛛 「そんな。もっと近づいて」

一市 「それだけじゃない。私、高い所だめですよ。一寸、高さがあるともう眼が。だからなんです。だから私、おかしいなと思ったんです。そこがね、私、引っ掛かって…」

蜘蛛 「行かないんですか」

一市 「いや、行きたいのはやまやまです。でもね」

蜘蛛 「(再び御守りを渡し) だったら、子供みたいなこと言わず」

一市 「しかし、疑問が」

蜘蛛 「疑問というのは何です。水ですか」

一市 「そうじゃありません」

蜘蛛 「じゃ、何です」

一市 「だから、その…どうして、私なんです」

蜘蛛 「どうして…」

一市 「大事なことです」

蜘蛛 「私は言いつけられただけですから」

一市 「それだって、あなた」

蜘蛛 「まあ…一つ言うとするなら」

一市 「何です」

蜘蛛 「あの御方は、大変、気まぐれですから」

蜘蛛、池に一市を突き飛ばし、退場。

太鼓の連打する音。

舞台上、暗くなり、霧。

荒々しい笛の音も入ってくる。

一市 「そうして、私は地獄の底へと落とされました。あの蜘蛛が言う通り、池の水の下は濃い霧で覆われておりました…！」

一市、霧に消える。

太鼓の音、OUTしていく。

暗転。

地獄の住人の声、聞こえ出す。

### ○壊れた扉前

溶明。

地獄の住人 1、2、3、4、5、荷車を引き、登場。

ボロをまとい怒りをぶつけている様子。

「ノド…ノド…ノドの渴きをうるおせ！」

干からびた この渴きを！

しわがれた砂の体を！

ミズ…ミズ…ミズをこの手で飲ませろ！

ひとすくい いやひと海！



いくらあっても足らねえ！  
根こそぎ飲んで飲み干せ！

(俺は百年見ちゃいねえ！)

ノド…ノド…ノドの渴きをうるおせ！

干からびた この渴きを！

しわがれた 砂の体を！

ミズ…ミズ…ミズをこの手で飲ませろ！

ひとすくい いやひと海！

ノド…ノド…ノドの渴きをうるおせ！

ノド…ノド…ノドの渴きをうるおせ！

鬼の鳴き声。

一同、騒然として逃げ惑い、退場。

舞台奥、壊れた扉が風に揺れている。

舞台中央の穴から出てくる男たち。

人生の何たるかを見つけられなかった老人、

報われぬ労働者、

栄華を誇った元貴族。

それぞれ穴掘りの道具を手をしている。

元貴族 「いやだ、いやだ、いやだ…もう、いやだ」

老人 「何だよ。交代の奴ら、誰もいなくなってる」

労働者 「大丈夫。ずっと離れてる。思ったより」

元貴族 「どこ」

労働者 「ホラ、向こうの」

元貴族 「ああ、ありやひどい」

労働者 「大丈夫。こっちに向かって来ちゃいない」

老人 「気がついたか。ビリーがいたぜ」

労働者 「ビリーが」

元貴族 「どこに」

老人 「もう見えなくなったよ」

元貴族 「ホンとか。間違いなかったか」

老人 「ああ。あの辺りをうるついで」

労働者 「験が悪いな」

老人 「放つとけばいい。相手にしたって仕方がない」

元貴族 「近くでひと儲けするつもりか」

老人 「さあね。人集めだけかもしれない」

元貴族 「しかし、何かは企んでいるんだろ。あれはいつだって儲け話に鼻をかかせてる」

労働者 「確かに、くせ者には違いない。あの人さらい」

元貴族 「何だか一気にやる気が失せたね。ああ、いやだ、いやだ、いやだ…」

労働者「またそうやって座り込む」

数学者、手に持った棒きれで地面に数式を書きながら、登場。

老人「おい、まだやってるのか」

元貴族「随分だな。こんな、地べたを数字だらけにして」

老人「交代の奴ら、どっちへ逃げてった」

数学者「(終始、静かに地面に書くのを続け) この数式は真理につながってる」

元貴族「真理。まだそんな」

労働者「どこまでいっても答えに行きつかねえならよ。この際、思い切って言うがな」

そいつは根本すら間違ってた。大元がよ」

元貴族「人間、諦めが肝心」

数学者「間違いかどうか確かめるには、これよりまだ先を見なくては。数式は迷路と同じ。

答えはいつも先にある」

元貴族「頭の中に地図を広げて、世界の涯を探そうっていうの」

労働者「理屈だな。理屈。一遍、俺たちと体動かして働いてみる。その分厚い眼鏡の奥に

見えてくるもんだってある」

数学者「考えたことあるかい」

元貴族「何を」

数学者「どんどん遠ざかっている事」

労働者「遠ざかる…何から」

数学者「この空から。天上からさ。みんな綺麗な水を求めて、どこまでも掘り進めていく

けど、掘れば掘るほど遠ざかる」

老人「空の上には、あの分厚い雲が広がるだけだ」

数学者「雲の上だよ、僕が言うのは。雲の上の空の果て。この世の向こう」

元貴族「この世の向こう。よせやい、まるで何もかも知ってるような」

労働者「理屈だよ、それこそ屁理屈」

数学者「僕の話すのはだね、まだ誰も知らない現実の話。小さな世界の中の大きな真実」

元貴族「地べたの数字がこの世全体を表してるてる」

労働者「これが」

老人「あんたが言うのは、まるで次元の違う世界」

元貴族「そうそう異次元、大事件。これは二次元、三次元」

数学者「今のところ十一次元」

元貴族「十一次元！そんなに計算しても見つからないの」

数学者「世界の涯とこの世の真理は、ヒモ理論で語られる。計算してもまだ行きつかない。

僕らの真理はまだ本当の答えにたどり着かない」

老人「そうやって地べたで空の計算ばかり」

労働者「空の勘定。から勘定」

数学者「ヒモ理論は入り組んだ糸のよう。それ全体が一つに広がる」

老人「広がる糸か。まるで蜘蛛の巣だね」

数学者「真理がヒモで結びつくなら、その蜘蛛の巣はこの世の全部と絡み合う。糸を手繰

れば空の向こうにだっていける。元を辿ればみんな向こうから来たんだから」

老人 「その勘定が行き着けば、糸の絡みは取れるってわけ」

数学者 「次元の穴が見つかれば抜け出すことも出来るはず」

労働者 「穴なら掘らなきや出くわさないぜ。な、やっぱり掘らなきやなるまい」

数学者 「ああ、やっぱりそこへ行きつく。本当にそうだろうか。なあ、本当の本当に」

老人 「だったら待ってみるか」

元貴族 「待つ。何を」

老人 「いや、もう一度。何かをさ」

元貴族 「何を今さら。いくら待ったところで」

老人 「同じことか、やっぱり」

元貴族 「あんただだって待ったろ、生きてた間中ずっと。けれど、とうとう来なかった」

老人 「そうだな。来なかった」

労働者 「ただ待たされただけで」

老人 「そうね。そうして一生が終わった」

元貴族 「ほら、答えが出た」

老人 「やれやれ」

元貴族 「さて、東へ行くか、それとも西か」

労働者 「ここは見込みなしかい」

老人 「どうか。あるようでもあり、ないようでもあり。ま、どこへ行っても同じかも  
しらん」

労働者 「どうだい、もうしばらくここで。今、動くのもつまらん」

老人 「まあ、それは別に構いやしないがね」

元貴族 「相も変わらずどっちつかずだな。よし、それなら今度は少し方角を変えて」

労働者 「きつとそのうち出くわすだろう。そうさ、ないわけないんだ。どこかにあるんだ」

数学者 「そうやってまた遠ざかる」

労働者 「さあ、どうだろうか。あるんだろ、答えはまだ先に」

老人 「まったたく。交代もいやしねえ」

元貴族 「ああ、いやだ、いやだ……」

三人、穴掘り作業を始める。

扉の奥から一市、登場。

相当に疲れ切った様子。

老人 「おや」

一市 「何度も気を失った……。何しろ喉が渴いて……。真っ暗な闇の中を幾日も幾日も歩いて倒れたのだ」

元貴族 「そうかい」

一市 「ようやく出られたと思ったら、まさかこんな……。ひたすら荒れ地が続いて……。これ以上はもういけない」

老人 「闇に行く長さは人それぞれさ」

元貴族 「すんなり来るのや、とんでもなく時間をかけてくる奴」

老人 「皆、何も分かんず手さぐりで歩いてくるからな」

元貴族 「この荒地にしたって。こいつはどこまでも続く。何も無い。果てしない」

一市 「それにしてももういけない。どうにも喉が渴いて」  
三人、作業を続けている。  
一市 「少し分けてはくれまいか……」  
三人 「……」  
一市 「お前たちの水をね……少し。困っているのだよ。なあ」  
元貴族 「聞こえてるよ」  
一市 「だから、その……水をね」  
老人 「ないんだよ」  
一市 「ない……」  
労働者 「あんたも手伝え。出たら少し分けてやる」  
老人 「こうやって地面を起こしていくと、ほんの少し出ることがある」  
元貴族 「ごく稀にね」  
労働者 「それをすくってすすする」  
一市 「それだけか……」  
労働者 「それだけだ。だから、渴くんだよ……この世界は。いつだって」  
老人 「ひどくね。やたらと渴く」  
元貴族 「カラカラにね」  
一市、三人から離れていく。  
労働者 「手伝わんのか」  
元貴族 「おーおー、モノがないと分かりや途端に」  
一市、疲れたように座り込む。  
一市 「あれは何だい、先刻の……地響きのような、うなり声のような」  
労働者 「ああ、あれ。気になるか」  
元貴族 「なるだろうな、そりゃ」  
老人 「じきに分かるさ」  
一市 「何だい。もつたいぶるな」  
老人 「ここにいれば否が応でも、そのうち目の当りにする」  
一市 「長いのか。お前たち」  
老人 「長いね」  
一市 「いつから」  
元貴族 「それすら忘れた」  
老人 「じきにこうなる。どうでもよくなる」  
一市 「お前たちの中で犍陀多という男を知ってる者は」  
元貴族 「犍陀多」  
一市 「そう。糸が切れて、落ちた男。天からの銀の糸が」  
老人 「あのことを言ってるんだろ」  
元貴族 「ああ、あれ」  
一市 「知ってるのか！」  
元貴族 「まあ、知っていると何か何というか」  
老人 「あれは、みんな落ちたからな」

一市 「みんな」  
元貴族 「糸が切れてね。ぷつりと」  
労働者 「大勢がわれ先につかむもんだから」  
老人 「それに、あれはあの時の風が」  
一市 「風」  
老人 「ものすごい風さ。いきなりね。ごうって」  
元貴族 「吹いたっけか。そんなもの」  
労働者 「吹いたさ。とんでもなく強い力が働いて」  
老人 「あれはないよ。あれじゃたまらない。みんな落ちたよ」  
一市 「その糸：そんなにあっけなく」  
労働者 「ああ。頼りなかった。そりゃ、あんなに細い糸だもの」  
一市 「それは…その時、一度きり」  
老人 「ああ。それきりだね。滅多とないんだろうよ」  
乾いた風(笛)の音。  
一市 「どこに行けば会える、その男」  
老人 「さて、随分と前の話だからな」  
一市 「落ちたのはどの辺りだい。その糸が切れた場所」  
老人 「東だったか。いや、西か」  
元貴族 「街だろ」  
老人 「そりゃ、街は街だが。どこいらの辺りだったか」  
労働者 「あの男、一番高くから落ちたからな。足なんかこう…引きずってるかもしれない」  
一市 「足を」  
老人 「そうだな。引きずってるよ。そういうのを探してごらん」  
一市 「しかし、それだけでは手がかりも何も…」  
突如、作業に手ごたえのあった様子。  
元貴族 「おお！」  
労働者 「来たか」  
一市 「(穴の中を覗き) 何。どうした」  
元貴族 「(小躍り) おお！出たぞ、出た。とうとうやった」  
労働者 「(見て) このマヌケ！よく見る」  
元貴族 「まさか！(膝をつき落胆) ああ、折角：あれだけ時間をかけたっていうのに」  
一市 「水なら出てるじゃないか、濁ってはいるが、ほら」  
老人 「まずいな。こいつは量が多すぎる」  
労働者 「暴動だ。民衆の怒りが集まった時の増え方だこれは。じきに衝突が始まる」  
老人 「やれやれ。よりにもよって内乱かよ」  
元貴族 「(穴に向かって) 馬鹿な奴らめ！」  
一市 「どうした。何が起こった」  
老人 「行こう。ビリーもうろついでる」  
元貴族 「あいつはいつも、こういう弱みにつけこむからな」  
一市 「少しくらい飲めないのか…」

労働者 「急げ。すぐに勢いが増してくる」

三人、そそくさと荷車に道具を積み込んでいく。

一市 「頑張れば飲めるんじゃないや。え。この際、一寸、火を通すとかこしたりして」

老人 「来るか、一緒に」

元貴族 「ビリーがうるついでるってよ」

一市 「ビリー」

元貴族 「騙らからかされて連れてかれんな」

老人 「かどわかしだからな。えらい目に合うぜ」

一市 「連れて行くって、どこへ」

元貴族 「たいていは大道芸やサーカス」

老人 「人の集まる飯場やコウバなんかの前で芸をさせられる」

一市 「芸…。その飯場やコウバというのは…」

労働者 「(地面を指し) こいつを沸かして蒸留させた混ざり水をな、作る作業場」

一市 「混ざり水」

元貴族 「まがい物さ。水に見立ててごまかすんだ」

老人 「ここではそいつがものをいう。命より大事なんという奴もいるくらいさ。ただ、

それが体に染みつくと、いつしかホントの水の味も忘れちゃうがね」

元貴族 「所詮は代替え品だからな」

一市 「(穴に近づき) これでは…どうにもならないのか」

老人 「やめとけ」

労働者 「(道具を見て) これで全部か」

一市 「なあ、どうにか飲めないか。蒸留したり何かすれば…」

老人 「行こう」

元貴族 「ああ、いやだ、いやだ、いやだ。もういやだ…」

一市 「なあ、おい、本当に」

地獄の住人たち、荷車を引き、退場。

一市、一人残り、掘った場所を見ている。

やがて、たまらずすくってみようとする。

ステッキを持った男、登場。

落ち着いた様子で、ボロをまといながらも紳士的な装いを残している。

ビリーである。

ビリー 「そいつを飲んだら鬼になりますぜ」

一市 「(ビリーに気づき)…」

ビリー 「いや、鬼にね」

一市 「鬼…」

ビリー 「ええ」

一市 「鬼って何だい」

ビリー 「ご存知ない」

一市 「鬼は知ってるよ。もののけのアレだろ」

ビリー 「もののけ。笑わせちゃいけません」

遠くで鬼の鳴き声。

ビリー「あの男も昨日までそんな穴を掘ってました。そいつを飲んで御覧なさい。ああなります」

一市「あの鬼は、人か…!?!」

ビリー「それにね、そいつは血です」

一市「(のけ反る) 血!?!」

ビリー「染み出るんですな。娑婆から…現世から。飲むとあぁなります」

一市「人の血が鬼を…」

ビリー「まあ、人間の業の結晶だという話や、生きていた時代の苦しみや悲しみが、みんなどろどろに溶けて集まっているんだとか…諸説あります。まあ猛毒です。詳しいことは知りません。誰も」

一市「業の結晶…」

ビリー「ああ、こいつは量が多すぎる。暴動だな」

一市「先刻の連中もそう言ってた」

ビリー「虐殺や殺りくともなると、それはもう恐ろしいくらいに湧いて出ます。わずかな間でどす黒い血の池を作って」

一市「血の池…」

ビリー「本当のところを言いますとね、ここでは、そんなもの飲む必要なんてまるでないんです、まるでね。だって、死んでるんですから。しかしホラ、ここは渴くもんだから。つい飲まずにはいられない。渴くんですよ。カラカラにね。そりやもう、気が違いそうになるくらい。だからみんな、ホンの少しのつもりで手を出して…。そしたら、あの様。もがくんです。苦しんで。地獄の責苦です。引き裂かれんばかり、毒が体中を駆け巡って」

一市「お前たちも…皆、そうやって」

ビリー「飲めば正気を無くします。それは苦しいですからね。治まるまでのうち回って、長い時間をかけ、ようやく正気を取り戻すと、今度こそは飲むまいと誓うんだ…でもダメです」

一市「ダメ…」

ビリー「また口にしますから。喉が渴いて。そして、また鬼になる。正気に戻る。また飲む…。」

一市「ずっと…」

ビリー「永遠にです。何しろ、死にませんから」

一市「(恐ろしくなり)…」

遠くで鬼の鳴き声。

ビリー「あなた、人を探しているとか」

一市「聞いていたのか」

ビリー「そりやあなた、私はあちこち噂を拾い集めてますからね。小耳にだって入ってきます。そいつが生業ですから」

一市「探しているのだ。毘陀多という男。知ってるか」

ビリー「ええ。それはまあ」

一市 「本当か！」

ビリー 「これでも顔は広うござんして」

一市 「今、どこに。何でもいい、教えてくれないか」

ビリー 「そう、ここから少し離れた街の…。私ね、案内して差し上げようと思って」

一市、徐にビリーから離れて。

ビリー 「何です」

一市 「お前、ビリーか」

ビリー 「おや、ご存知で」

一市 「寄るな、もういい」

ビリー 「どうしました」

一市 「ひとかたじ人勾引と聞いている」

ビリー 「(笑) 誰がそんなひどいでまかせ。いいんですか、行かなくて」

一市 「行きはするさ。ただし、一人で。場所だけ教えよ」

ビリー 「冗談はおよしなさい。ここは初めてでしょ。無理無理、とつても入り組んでいるんですから。それに途中、色んなのと出くわします。鬼だけじゃありませんよ。追いはぎや猛獣だって」

一市 「脅したってダメさ」

ビリー 「いいええ、脅しなんかじゃ。それにね、その場所を知ってる者はここらじゃ滅多にいやしません」

一市 「うまいことを言ってる。もういいよ」

ビリー 「ホンとです。だからホラ、案内します。して差し上げます」

一市 「いらぬと言っている！この人さらい」

ビリー 「そうですか、残念ですな…ま、いいでしょ。お考えなさい。すぐに分かります、私の言うのが嘘じゃないってことが」

一市 「分かったから。こつちへ来るんじゃないよ」

ビリー 「けれどね、あなたはきつと私の所にやって来ます。その時はどうぞお気兼ねなく」

一市 「行けと言うのに！」

ビリー、軽く会釈し、退場。

一市 「己をしつかりと持たねばなりません。隙あらばこの足すくわれ、互いを落とし入れ合う煩惱、不毛の世界にございます。智慧の光など届く気配もなく、ひたすらに悪因悪果の業をくり返す無明の在り処…。さても、今さらながらに見てみれば、見渡す限り荒野の中、無数に掘られた穴また穴。ひとすくいの水ですら求めることも出来ぬ有様でございます。一切行苦。尋常な渴きではございません。しかし、これは地獄のほんの入り口。苦難の道はこれから先、まだ長く続き…」

近くで鬼の鳴き声。

労働者、老人、数学者らの地獄の住人たちが悲鳴を上げて集まってくる。

住人1 「鬼だ！鬼が出た」

住人2 「こつちに向かってくる」

一市 「鬼が」



住人3 「どけ、どけ！邪魔だ」

住人1 「すぐこの先だ。じきにやって来る」

住人2 「あの野郎。来たばかりで頼りないと思ってたんだ」

住人1 「何かにつけて考え込む、小役人だった」

住人2 「人の言うことも聞かず、いきなり口つけやがって」

労働者 「あんたか。ここらはもうダメだ。逃げなきゃならない。なるだけ遠くへ」

一市 「もう一人は」

老人 「食われた」

一市 「何だって」

労働者 「血の池の毒がまわったってわけ」

一市 「お前たちはとも食いをするのか!？」

老人 「この毒は人を狂わせる。火のついた渴きが我をなくさせ、生き血を啜りもすりや、

殺し合いもする」

数学者 「来るぞ！こっちへ」

鬼の鳴き声。

一市 「鬼となったその男、正気を失い、暴れまわっております。欲望のままに毒水をすすれば、人はあのようになってしまいうのでございましょう。それはもう獣や畜生そのもので……」

労働者、老人、数学者、退場。

一市、住人たちに声をかけて回る。

一市 「犍陀多を知らないか。糸が切れて落ちた男。どこかの街にいるらしい」

誰も聞く耳を持たず、逃げ惑い騒いでいる。

武器を持った住人3、4、5鳴き声に向かっていく。

口々に「殺せ!」「殺せ!」と大声を上げている。

慣れた様子でステッキを使って人々を蹴散らし、悠然と歩くビリーの姿。

一市 「(目に止めて)……」

ビリー 「私はこんな修羅場、何度も見ていますから」

一市 「あの鬼を殺そうというのか。死ぬのか。この世界には死がないはず」

ビリー 「そのからくりを説明するとなると大変に厄介です。一旦、土に還って、浸み込んで、長い時間かかって暗闇を彷徨い歩いたあげく、また、あちこちにある入り口から現れます。その間、亡者となって別の地獄世界に行くという者や、霧のように真白な夢の中を漂うという者。どれも定かじゃありません。ただね、死にはしません。死ねません。決して」

一市 「三世……永遠をくり返す……!?!？」

ビリー 「忘れちゃいけません。ここが地獄ということを」

鬼の鳴き声。

一市 「分かった!万事、お前の言う通りに」

ビリー 「(不敵な微笑) 何です」

一市 「頼むから私を連れて行ってくれ!」

ビリー「ほらね。やっぱりやって来た」

暗転。

読経の声、殴りこむ。

○寺

法華経を唱え、老師に続き弟子たちと沙弥しゃみ、登場。

一市の姿もある。

老師「昨夜たどり着いた旅人が、今朝方、息を引き取った。差し出す粥も喉を通さず、それほどまでに弱った体でこの地に訪れたのには、何か理由が…？」

黙念「この寺を目指してやってきたということですか」

老師「左様。源宋からの話を聞いて」

一同、ざわめく。

珍念「源宋！」

黙念「源宋上人が！？あの遊行ゆぎようの旅から消息を絶った」

一市「上人様は今！」

老師「源宋の消息は未だ不明である」

黙念「それでは…その旅人の目的は」

老師「旅人からは源宋に続く賢者をと」

黙念「その村にはもう上人様はおられないと」

老師「その様子かと。ただ、詳しくは聞けずじまい」

珍念「他の土地へ移られたか」

黙念「いや。求める民を残して。あの上人様が無下に立ち去ることなど」

珍念「では、何か身の上に」

黙念「止めないか。縁起でもないことを」

珍念「しかし」

老師「いずれにしても、あの旅人の村に源宋が留まり、教えを広めたことは間違いない。

御仏の教えは深く浸透しているようだ。それゆえに彼らの救いを求める声も切実」

黙念「その村で何が？」

老師「息絶える間際に漏らした様子では…戦に飢え、多分にもれず民の苦しむところ。

しかも昨今、日照りが続き、彼らの耐え忍びもいよいよ限界に。そこで、我らに救いを求め、一人ここまで命を賭してやって来た。そこまでの覚悟で、御仏の教えを求める者たちから到底このまま目を反らしておくわけには。よいな、お前たちの中から布教の旅へ続く者を」

一市たち、一斉に手を挙げて身を乗り出す。

黙念「は、はい、早速もって私が！（言いながらも後ろに回る）」

珍念「私めを！（言いながらも後ろに回る）」

沙弥「いいえ、私を！（言いながらも後ろに回る）」

弟子たちに押し出される形で一市が前に出てくる。  
老師、一市へ歩み寄り、肩を触れる。

老師 「一市。お前は常日頃、源宋を一番の師と仰いでおったな」

一市 「はい。得度を賜り、物心ついた頃より教えを乞いました」

老師 「行つてくれるか」

一市 「身に余る光栄」

弟子たち、感嘆の声。

老師 「安堵致した。ならば即刻、旅人の村へ赴き、彼らを救うて教えを広めよ」

一市 「しかと承りました」

老師 「そして、源宋の消息を探り、伝えよ」

一市 「必ずや」

老師 「御仏のお力にすがり…」

老師、合掌し退場。

弟子たちが一市の周りに集まる。

黙念 「いやはや危ないところだった」

珍念 「正直ヒヤヒヤした」

沙弥 「(一市に) まあ、気の毒なことだが」

一市 「(兄弟子たちに) 何を申される。我が師の消息を知りたくはないのか」

黙念 「ないこともないではない」

珍念 「あるとないとを比べてみれば、若干あるに寄っている」

一市 「何です。その限りなく消極的な」

黙念 「要するにだな、そんなことをしても将来の道筋には繋がらんということだ」

沙弥 「ぶっちゃけー」

珍念 「この寺は宮中をも出入りできる格式ある仏閣。ともすれば出世の道も切り開けよ

うものを。僧侶が遊行に出るとなれば、最低でも十年から十五年はその道、費やすのが道理。分かるであろう。それがどういふことか」

一市 「分かりませんな」

沙弥 「一生を棒にふったも同じなもの。同じなもの」

一市 「(沙弥を振り払い) 何を、このこましゃくれ」

黙念 「お前は余程、世間を知らん」

一市 「俗物の考えですぞ」

珍念 「寺の外に出たことは」

黙念 「ないのだ、生まれてこのかた。赤子の時分、托鉢の門前町で源宋様に拾われ、親

一市 「素性、何一つ分からず」

一市 「私は俗世を捨て、御仏にこの身捧げたのです」

珍念 「そういうところがいかにも源宋様の教えらしい」

黙念 「若き日より至極の知識を身につけられ、末は帝か大臣にお仕えすること間違いなしと名は轟き、信望を集めたにもかかわらず、結局は、自ら進んで世捨て人の道を選ばれた」

一市 「世捨て人、何と罰当たりな！人々の救いに身を捧げた、尊い教えの旅路を」

珍念 「ままま、それとて各々考え方の違いというもの」

黙念 「ふん。万が一、源宋様にお会いしたら、こう伝えるがよい。どうか、未永く旅をお続け下さいませ。あなた様にお戻り下さる席はございませんと」

沙弥 「お前の帰る頃には、我らは都で立派なお抱え僧侶となつていよう」

弟子たち、一斉に笑う。

一市 「お黙りなさい！」

黙念 「ま、元気で」

珍念 「ま、達者で」

沙弥 「アンタも好きね」

弟子たち、退場。

一市 「嘆かわしきかな…これが今の世の比丘びくの姿。五蘊ごうんじゆうく盛苦にまみれた世界。御仏よ、

どうか彼らに救いの道を。彼らは未だ、何を悟らぬ者たちなのです。(座禅に入る) 心静めよ…ただ御仏のお力あるのみ。どうか私めにお慈悲を。そして、これから行くその村にも、どうか…」

一市、奥の通路に上がり、拜む。

照明、CHANGE。

○見世物小屋の近く

ビリー、登場。

ビリー 「あなた、そろそろお起きなさいな」

一市 「(目を開け、だらりとした姿勢に)…」

ビリー 「行きましようぜ」

一市 「一体、どこまで行くのだ。もう、足が棒のようになってしまつて」

ビリー 「あなたという人もたいがい愚痴の多い。そうたいした日にちも歩いちゃいないでしように」

一市 「何を言うか。もうすぐだ、もうすぐだと言いながら、一向に出会える気配など。

それにこの暑さときては、ことさら喉も渴いた」

ビリー 「仕様のない方ですな。それ、よく御覧なさい」

ビリー 前面を指差す。

痩せた若者、登場。

手に持った数本の棒を背後の地面にさし出す。

やがてそれは牢屋となつていく。

一市 「あれは」

ビリー 「あそこが、アレなんで」

一市 「あれが！ 韃陀多…！」

ビリー 「行きますよ」

一市 「身震いしておりました。捜し求めたその男が、すぐ目の前にたたずんで。この広大な地獄の底で、ともすれば長い年月かけて尋ねまわらなければならなかったや

もしれぬ身の上に、こうも早く出会えたのでございます。おそらくこれは、私共には計り知れない目に見えぬ力が働いて。そう、あの御方の。あの御方のお導きがあつてこそ。そう考えずにはおられませんでした」

ビリーと一市、牢屋の若者に近づく。

一市 「もし…」

若者 「…」

一市 「もし、あなた」

虚無感の塊のような若者、ちらと振り向いてみせる。

背後からビリーの姿を見止めると、一瞬息を飲む。

ビリー「どうです。そんな所からじゃよく話も出来やしな。中に入って御覧になっちゃ」

一市 「いいのか？」

ビリー「雑作もない」

ビリー、棒の鍵仕掛けを外し、一本を抜いてみせる。

若者、じっとビリーを見つめている。

ビリー「どうぞ」

一市、中に入っていく。

一市 「そう強張らんでもよろしい。私はね、お前を助けに来たのだよ。ここからお前を救い出すために、はるばる私は降りてきた。分かるね。私は天上から来たのだよ。かつてお前が一度試みたあの極楽から」

若者 「(ビリーを見ている)…」

ビリー「(頷く)…」

若者 「(落ち着かない様子に変わって)…」

一市 「何、心配することはない。万事は用意が整っているのだからね。私はお釈迦様の御言いつけで、お前を連れ出しに来たのだから。合図を出せば、お前の助けたあの蜘蛛が糸をたらしてくれる。そういう手はずになっているのだよ。だからね、安心するがよい。じきにここから出してやる。可哀想に…長い間、こんな地獄の片隅で鬼に怯えながら。いいね。私と行こう。お前は犍陀多に間違いないね」

若者、徐に牢の外へ走る。

一市 「足を引きずっていない…」

ビリー、仕掛けを戻して牢を閉める。

一市 「何の真似だ」

ビリー「(見つめる若者に) 覚えていたかい」

若者 「(頷く)…」

ビリー「そういうことさ」

若者、横目で一市をちらと見た後、一目散に駆け出し、退場。

一市 「どこへ行く」

ビリー「あの男はもう戻ってきやしません」

一市 「おい！犍陀多！」

ビリー「いやあ、違うんだな。言いそびれてましたが、あれは犍陀多なんかじゃ」

一市 「騙したのか！」

座長、登場。

ボロのシルクハットに派手な蝶ネクタイ姿。

いくつもの水筒をぶら下げている。

口笛でビリーを呼ぶ。

一市 「(ビリーに) 待て、話はまだ」

座長、鞭を振るう。

一市 「(驚き) ひい……」

ビリー、座長に鍵を返し、水筒を手渡される。

ビリー 「(一市に) なあに、ここにいりゃ色んな人が出入りを。だからきつと……ね(行こうと)」

一市 「おい！どこへ行く」

ビリー 「(会釈して) いずれ、また」

一市 「置いていく気か！」

ビリー、退場。

一市 「おい！待て」

座長、鞭を連打。

照明、CHANGE。

上手、下手から座員たち、登場。

座長、感情を高ぶらせもせず、しごく慣れた様子。

大袈裟な動きで、声高に口上を始める。

座長 「紳士淑女の皆様方！(鞭) 新作。新作。皆様、お待ちかねの新作だ。世にも珍しい出し物が、装いも新たにまたもややって参りました。(鞭) さあさあ、ようく御覧なさいよ。今宵、お目見えしたこの男、そんじよそいらの坊主じゃない。(鞭) 地獄じゃ坊主も珍しくもないが、驚くなかれこいつは他とはまるで違う。(聞き耳を立てる格好) え……姿形は変わらないって。見た目じゃない。見た目じゃない。(聞き耳) いやいや違う。いや違う。単なる極道もんの生臭坊主というだけで、わざわざ皆様の前にお出しするわけなど。はい。はい。分かりましたよ。ええ。ええ。申しますとも。ようくお聞きくださいませ。実はこの坊主、元来た所がちよいと変わっております。(調子を取って) 遙か彼方の世界が果ての、光り輝く天の橋。誰もが夢みてあこがれる、かの麗しの往生楽土！(鞭) な、な、何とこの坊主、極楽からここへ来たんだと」

太鼓がけたたましく鳴る。

一市、その様子に驚く。

座長 「さ、お笑いを頂戴したよ。皆様に御挨拶してみちゃどうだい」

一市 「……」

座長 「ぼかんとしているよ」

太鼓。

一市 「(舞台前方を見回し) 何だ……この鬼の群れ」

座長 「ええと、お前さん。誰かの使いでここにいるんだったね」

一市 「(見る) ……」

座長 「誰だったけか」

一市 「え…何」

座長 「だから、使いでね、来たと言ったね」

一市 「そうだ」

座長 「誰だね」

一市 「御釈迦様」

座長 「(聞こえないふり) え…」

一市 「御釈迦様だよ。あの御方」

太鼓。

座長 「(鞭) 出ました。衝撃の告白。神秘のヴェールに包まれて、清らかな声で仏の使いと申します。うそぶく素振りは露ほども見せず、ただただ瞳の奥にうかがい知れぬ憂いを帯びるばかりなり。おお、お前たちは何という可哀想な輩であるか。私は遙々、西方十万億土の彼方から救いを授けに来たのだよ」

太鼓。

一市 「何だ。何故、皆で笑っている」

座長 「本人、至って真面目です」

太鼓。

一市 「これは一体。何が始まっている。何が」

座長 「(きわめて大袈裟に) あの御方からどんな言いつけを」

一市 「どんなって、その…人探しだよ」

座長 「尋ね人！」

一市 「その男は一度、天上へ来るのにしくじってね」

座長 「しくじった男！」

一市 「元は悪党だがね。しかし、あの御方のお目に留まったのだ。生きている間に一度、ある者の命を助けて。連れ戻さなくちゃいけない。その犍陀多という男」

座長 「犍陀多さーん」

一市 「私はね、真剣なのだよ。すぐさまこんな所を出て、大切な役目を果たさなくては。使命を仰せつかっているのだからね。あの御方から申しつかった尊い使命を。まさに智慧と慈悲に満ちた救いの道を」

座長 「どうだい！御覧の通り、相当の重症だ」

一市 「！」

太鼓。

座長 「今回もまた、今までも増して手ごわいのを用意させて頂いたよ」

一市 「お前たちは私の話をまるで…」

座長 「(鞭) さあさ、お立合い！これより始まる新たな出し物。珍品、奇獣の類に劣らず、稀にみる迷走の予感。波乱、そして危険な香りに満ちたロマンあふれる一大叙事詩―(鞭)。一夜限りでは語り尽くせぬ虚構の果て。至福のひと時をどうぞあなたに」

一市 「虚構！」

座長 「あざむき、まやかし、虚飾に満ちたこの世界。落ちてくるにもそれなりの理由が

「ございます」

一市 「私が何をしたと！」

座長 「(制し)ごめんなさいね。今、私の話す番だから」

太鼓。

一市 「私は先を急ぐのだ。こんな所で留まっておられるものか！」

座長 「どうぞです。堂に入ったるこの物言い。久方ぶりの大物の予感。我々の前に突如として現れた、この希少なまがい物。美辞麗句につつまれた、偽り、贋作の数々。めくるめく展開と秘めたる謎。ひと夜ごとに暴かれていく新たな真実に、どのような展開が待ち受けておりますか。不肖、当一座を率いますこの私めが、皆様になり代わり探って参ります」

一市 「いいから出せ。出せというのに」

太鼓。

座長 「(鞭)今宵、プレビューはこれにて終了。皆々様方、胸の高鳴りひき寄せる顔見せとなりましたでしょうか。(鞭)明日よりはじまる『極楽からはじめてのおつかい』。必ずやご満足いただけましょう。さあさあさあ、乞う御期待。乞う御期待だよ」

座長、鞭を連発してポーズをきめる。

太鼓の音、OUTしていく。

照明、CHANGE。

呆然としている一市。

一市 「私は…見世物に…なるのか」

座長、座員たちに水筒を投げ渡す。

群がり取り合う座員たち。

一市 「おい。あまりにひどい話じゃないか。騙されて閉じ込められた挙げ句、あんな大勢の前で、まるで私が口から出まかせでも言っているかのような」

誰も相手にしようとしなない。

一市 「おい。この先、私は」

座長 「(鞭)売られた者が、誰に向かっておいなどと！」

一市 「売られた…」

座長、懐から冊子を投げる。

座長 「そいつを読み込んでおけ。明日から正式に客前へ出すぜ」

一市 「これは」

座長 「お前の生きてきたこれまでの筋書き」

一市 「筋書き」

座長 「その通りに答えればいい。客はかぶりつく」

一市 「(冊子に目を通し)はア?はア?(冊子を投げ捨て)まるで、でたらめではないか」

座長 「そうかい、おおよそはアレから聞いたんだがねエ」

一市 「アレって、あいつか。ビリーか。あいつがどうして私のことを」

座長 「気に入らんのかい、その筋書き」



一市 「氣にいるも何も」

座長 「よかろう。それなら即興でいく。いいな、ぶつつけだ。お前は、その場その場で思いつくまま答えりやいい。こっちで上手く回してやる。(周囲の者たちに)よし、お前は前座にまわれ。テンポを上げてな。お前とお前はサクラに。間合いと頃合いを盗んでいけよ。それから、お前は…」

一市 「見世物なんて真つ平。第一、私はこんな所でこんなことをしている暇など」

座長、乱暴に鞭。

座長 「いつまでもガタガタ騒ぐんじゃないよ！」

一市 「ひい…」

座長 「ぬかるなよ。明日から客がどっと押し寄せる」

座長、退場

座員たち、後に続く。

座員1、2、3が近づいてくる。

一市 「待ってくれ。話はまだ…」

座員1 「無駄だよ」

一市 「(見る)…」

座員2、高らかに笑う。

座員3 「あの男には聞こえやしない。頭ん中じゃ今からショーが始まってら」

座員2 「アンタはもう出し物なんだからねえ」

一市 「誰」

座員1 「古株さ。ここのベテラン」

座員3 「(人懐っこく)先輩だぞ、おい」

座員2 「諦めな。ここから出られっこないんだから」

座員3 「無駄。無駄(笑)」

一市 「私はね、こんな所でこんなことをしている暇はないのだよ。私はね、私は…」

座員1 「言っても始まらない。あんたはもう見世物にされてしまったんだから」

座員2 「そう。お慰みなんだから」

一市 「お慰み…」

座員3 「慣れるよ。じき慣れる」

座員1 「まあ。まあ。ここまで来たらなるようにしかならないんだから」

座員1、2、3、笑い声をあげて退場していく。

一市 「嘘だろ…」

一市、氣力を失ったように崩れる。

暗転。

○村

シタールの音。

一市、倒れている。

村の長、登場。

お互い、弱った身体である。

長 「あなた、お坊さんで…」

一市 「み…水を」

長 「もしや、源宋様の…」

一市 「そうか…ようやく…たどり着いたのか」

一市、再び気を失う。

長 「もし…もし。しっかり！」

照明、CHANGE。

周囲から村人が集まってくる。

倒れた一市を抱きかかえ。

皆でゴザの上に寝かせる。

シタールの音、OUT。

一市 「(気がつく) ここは…」

長 「わしらの寺です」

一市 「そうか…」

長 「使いの男は、そちらへ行き着いたのですね」

一市 「(力なく頷き) かし…。一日ともたなんだ」

長 「仕方ない…。あれは私の息子です」

一市 「ご子息…」

長 「覚悟の上ではあったのです…」

一市 「我が寺で手厚く葬らせてもらった」

長 「(合掌) そうでしたか。ありがたい…」

一市、せき込む。

長 「(傍にいるタローに) おい」

タロー、うやうやしく水入りの小さな碗を差し出す。

一市 「すまぬ」

ハル坊 「おっ母あ」

母 「静かに」

ハル坊 「おっ母あ、おらも飲みてえ」

母 「これ、ハル坊」

一市、皆を見渡し、この水が貴重なものであることに気づく。

ハル坊に碗を差し出す。

ハル坊 「(飛びつく) …」

長 「(ハル坊の母に) おい」

一市 「よいではないか」

ハル坊、水を飲み干すが、その量はいたって僅かな様子。

ハル坊 「うめえ…」

ハル坊の母、泣き伏せる。

一市 「苦しがるう。さぞや今まで」

ハル坊の母、声を上げる。

一市 「泣きなさい。あなた方の苦しみは、その涙に値する。泣くがいい。私は全てを知っている。その苦しみを無くすために、私は源宋様に成り代わりこの地へやってきたのだから」

皆、合掌してむせび泣く。

長 「源宋様…」

タロー 「尊い御仁…」

ジロー 「あのお人は慈悲に満ちておられた」

アリオ 「あんなに偉えお人には二度と…」

一市 「聞かせてくれ。源宋様の消息」

一同、泣く。

一市 「何があったのだ」

泣き声、さらに大きくなり。

長 「雨が…」

一市 「雨…」

タロー 「この辺りじや、ここ四、五年まともに雨が降らねえ。特にこの二年はからきしだ」

ジロー 「田は枯れ、食う物どころか川も干上がり、一日一杯まともに水を飲むことさえ」

アリオ 「それでもあのお人は仏様を信じ…」

タロー 「ワシらの為、ただひたすらに雨乞いのお経を」

一市 「雨乞い」

タロー 「夜も眠らず、何日も何日も声を嗄らして」

ジロー 「しかし…それでも雨は降らなんだ」

アリオ 「病にかかる者、飢えて死ぬ者は後を絶たず…」

長 「あのお人は我が事のようにワシらの苦しみを一身にかかえておられた」

タロー 「苦しんで…苦しんで…そして、とうとう…」

長 「ある日…こう仰られました…。私が天上に上がり御仏に直にお願いして来よう」

一市 「直に…」

長 「そうです」

タロー 「あのお人はワシらに成り代わって(泣)」

ジロー 「即身仏に(泣)」

一市 「即身仏…!!」

アリオ 「あのお人はワシらの為に自らの命を投げ出された」

長 「ワシらの中には今でもあの御方の慈悲の心が…。あの御方の真の教えが…」

一同、むせび泣き。

一市 「そうか…。ああ、そうであったか。源宋様というお方は。源宋様というお方は…。

承知した…。私はこれで本当に全てを承知した…。私の御慕えする源宋様はやは

り…」

一市、合掌。

村人、それに続く。

一市 「さあ、一心に御仏の道へ…」

一同、経を唱え始める。

ヨシ秀 「ぼそりと」 けどよ…」

長 「ヨシ秀」

ヨシ秀 「(強く) いいじゃねえか！」

長 「やめさせろ」

一市 「何かね」

タロー 「おやめ下さい。あいつは昨日、かかあを飢えて死なせて、今やけに」

ヨシ秀 「俺には分からねえ…。分からねえんだ」

一市 「聞こう。ん。何が分からぬ」

長 「おやめ下さい」

アリオ 「ヨシ秀」

ヨシ秀 「煩せえな！俺はもう聞かすにはいられねえんだ」

一市 「言いなさい。いいんだ」

ヨシ秀 「あの人は…源宋さんはそりや偉えお人だ。優しいお人だ。あの人の教えは、そこそ難難辛苦を乗り越えた光の浄土そのものだ。けど…けんどもよう、あんな偉え人が、命まで捨てて仏様にお願いして…それなのにどうして…。どうして…未だに雨は降らねえんだ」

一市、固まる。

照明、CHANGE。

### ○見世物小屋

座員たち、うごめくように集まり出す。

座員たち 「闇を…闇を」

「終わることなく…」

「闇を…闇を」

「もがき続ける…」

笛、太鼓の演奏START。

座員たちの踊り始まる。

♪闇をすかして御覧なさい

うごめく怒りと嘆きの森を

それが地獄というところ

誰もがこの地で、終わることなく

誰もがこの地でもがき続ける」

座員たち ※以下のコーラス、背後でくり返し。

「闇を…闇を」

「終わることなく…」

「闇を…闇を」

「もがき続ける…」

座員1 「まさか、ここが自分の行き着く最果ての地だとは。お願いだから何かの間違いであつて欲しいと、何度、怒り悲しみに震えたことか。ええ。私は正しいと呼ばれていたんです。あだ名というか、いわばもう通り名で。名誉な呼名だと思つていました。正しい知識、正しい言葉、正しい行い。秩序を重んじ、規律を守り。慣わしなども極めてうるさく。不正は一切、許しません。自分ばかりではありませんよ。自分の生徒や家族にもすべてです。私の前では皆、襟を正します。皆が私を正しいと呼びました。それなのに気がつけば：こんな所へ。そりゃあ、間違えば厳しくせつかんしました。時にはひどくね。だって、正しく生きてこそ人間なのですから。そうでしょ。私は常に正しい生き方をしてきたんです：」

「♪闇をすかして御覧なさい

うごめく怒りと嘆きの森を

それが地獄というところ

誰もがこの地で 終わることなく

誰もがこの地で もがき続ける」

※コーラス、背後でくり返し。

座員2 「いえね。あたしなんぞがここにしていることなんぞ、そりゃまあ当然なんでしょうけど。前んとこじや性悪で通つてきましたしね。けどさ、あのご新造には負けませんよ。あたしが出会つた中でもあんな腹黒はいませんやね。綺麗な顔して、すまして見せちゃいますが、その実、あたしなんぞより余程汚い言葉でののしつたり、街中に性質の悪い噂なんか流したりしましてね。それは結局、あたしが死ぬまで続きましたか。そりゃ男はとりましたよ。でも、それはあなた、あれは旦那の方から言い寄つてきたわけ。色ごとの世界じゃよくある話じやござんせんか。売りもん買もんの世界なんですからね。ま、所詮は男と女、蜜に墜ちれば甘みに淀み。綺麗ごとじやすみません：」

「♪闇をすかして御覧なさい

うごめく怒りと嘆きの森を

それが地獄というところ

誰もがこの地で 終わることなく

誰もがこの地で もがき続ける」

※コーラス、背後でくり返し

座員3 「どうしてここにいるのか分かりません。私、信心だけは決して怠りはしませんでしたよ。生まれは貧しく、にぎり飯一つでも家族で分け合いました。教育というものには死ぬまで受けていません。だから、簡単な文字すら読めず終い。貰われて行つた先の親方はたいへん厳しい人でしたから、毎日、ビクビクしながら何でも言うことをきいていました。お休みすらありません。駄賃も時おり渡されるだけ。自分が何のために生まれてきたかなど考えたこともなかったですよ。それでも、ご奉公とはそういうものだと思つて仕込まれましたから、ただただ、言いつけられるままひたすら鹿や馬の皮を剥ぎました。背割り、裏打ち、叩き、いぶし：と、まあ、こいつも仕事となれば、殺生やなんぞと言つておられますでしょ。第一、入用なのはお公家様やお武家の方々ばかりで、私らなんぞは縁のないものなんです。

それでいて最後に落ちる所は同じ。情けや慈悲などあったもんじゃありません…」

「♪闇をすかして御覧なさい

うごめく怒りと嘆きの森を

それが地獄というところ

誰もがこの地で 終わることなく

※コーラス、背後でくり返し

座員1 「少しの過ちも許しはしません。正しく生きるとはそういうことです。それをやり

遂げる力を人間はちゃんと備えているのですから。そうでしょ。正さぬ者には戒めが必要なのです。多少の痛みは伴わないと。それが躰けですから。学びなのです。私の子供の頃などはもつとひどい目にあっていましたよ。間違いはね、徹底して正さねば。それなのに：私を恨むなんて、筋違いも甚だしい！息子は家を出て行きました、その後、家内も。私はたった一人です。死ぬまで。私は信じたものに裏切られたんです。いくら考えても理屈に合わない。私は正しいと呼ばれていたんです」

座員たち 「♪闇をすかして御覧なさい

うごめく怒りと嘆きの森を

それが地獄というところ

誰もがこの地で 終わることなく

※コーラス、背後でくり返し

座員2 「世間じゃみんなあの女の味方をしましてね。あたしのことなんざ、外道だの、毒

婦だのと、散ぎ、畜生呼ばわりされました。こういう時、男なんてものは逃げの一手を決めこむのがお決まりのことです。とうとう最後まであたしの前には現れやしない。ものの見事に裏切ってみせました。まあ今さら、腹も立ちやしませんかね。しかし、ホンとはこの筋書き、みんなあの女の仕業だつてことは分かってるんだ。そういうことをあの女、こともなげにやっつてのけます。そりやあ分かりますよ、女だもの。だからね、こつちの世界であの女に会った時、それはもう嫌つていうくらい笑つてやっつたんです。ほうら御覧、いくら上手い具合に立ち回つたつもりでいても、最後は皆、ここへ落ちて来る。ボロをまとつたまんま奈落の底へね。これからはあんたもあたしも、同じ邪まな世界の住人さ。ざまあないつたら（高笑い）」

座員たち 「♪闇をすかして御覧なさい

うごめく怒りと嘆きの森を

それが地獄というところ

誰もがこの地で 終わることなく

※コーラス、背後でくり返し

座員3 「言われるままに生きるよりほか、方はなかったんですよ。生まれながらに蔑みの身分に置かれ、貧しいなんてものじゃない。いつもひどく腹が減つて、思えば死

ぬまで飢えてました。畜生の殺生くらいは何です。私らそれ以下でしたよ。何の力も持たせちやもらえなかった。そういう時代でした。変えようにもどうにもならない。だからこそ、一生を終えた次の世界の始まりだけは望みをかけてきたというのに。これじゃ何のために信心して来たのか。私ら、長い時間かけて騙されて来たんです」

座員たち 「♪闇をすかして御覧なさい

うごめく怒りと嘆きの森を

それが地獄というところ

誰もがこの地で 終わることなく

誰もがこの地で 溺れ続ける…」

音楽、最高潮。

座員123、口々に訴えを続ける。

言葉が重なり合い、千々に乱れていく。

太鼓の音が調子を変える。

座員たち 「♪これが地獄というところ

これが地獄というところ

これが地獄というところ…」

「闇を…闇を」

「終わることなく…」

「闇を…闇を」

「もがき続ける…」

照明、CHANGE。

座長、鞭を鳴らしながら登場。

座員たち、牢の周囲に散らばっていく。

一市、中央へと押し出される。

笛、太鼓のリズム、OUTしていく。

座長 「…じゃあ、何かい。お前さんの一生は、その会ったこともない「あの御方」のため

めに捧げた人生だったと」

一市 「そうだ」

太鼓、けたたましく鳴る。

一市 「何が可笑しい！私はね、あの御方の教えを広めたのだよ。生涯をかけてね。あの御方の発見した徳深い教えを。真理をだね。それについては、もう何度も何度も話してきたじゃないか。話してきたろ」

座長 「(大袈裟に) 徳深い教えと真理」

一市 「そうとも。宇宙の法則なのだよ」

座長 「宇宙の法則！その発明品で人々を救うのかね」

太鼓。

一市 「救うなんてものじゃない。何しろ本当の幸福に目覚めるのだから」

太鼓。

座長 「目覚める」

一市 「そう。成道の世界を…」

太鼓。

一市 「つまり、涅槃の…」

太鼓。

一市 「彼岸の…浄土にだな…」

太鼓。

一市 「いちいち笑うんじゃない！」

太鼓。

座長 「つまり、お前さんは幸福を手に入れたわけだ」

一市 「それもとびきり本当のね。到達したのだ。幸福の世界に」

座長 「到達をね」

一市 「それこそが教えの世界そのものに身を投じることなのだ。一部になるのだよ。教えの世界の。宇宙の一部にね」

座長 「ほう」

一市 「苦のない世界だよ。言うなれば。解き放たれるのだ。何のしがらみからもね。ひたすら心穏やかに。私はね、それだけのことをしたのだよ」

座長 「なるほど」

一市 「お前たちはね、逃したのだよ。お前たちは生きた世界が甘く美しいことに気づくことなく終えてしまった。生きた世界ではね、誰もが四苦八苦を受けながら、それでも薄紙一枚を重ねるような積み重ねで、魂の浄化を行うはずだったのだ。お前たちはね、その大きな機会を逃したのだよ。私は違う。お前たちとはね。まるで違うのだよ。まるで」

座長、派手に鞭。

座長

「さあ、盛り上がってまいりました。本日もまた宇宙だの真理だの七色の舌を振りまいて、実しやかに弁をふるいます。連日お贈りしております極楽からの坊主。涙あり笑いあり。時には憂い、ファンタジーありと、実にエクセレント。目の肥えた皆様の期待に応え、充実の時を過ごしていただいております。どうです、むきになっているところが実に健気ではありませんか」

太鼓。

座長 「本当の幸福を得たと言ったね」

一市 「そうだ」

座長 「到達したと。苦のない世界だと」

一市 「言ったさ」

座長 「苦のない世界とは」

一市 「解き放たれた世界だよ。一切が。心地よさだけが残る」

座長 「なるほど。心地よさ」

一市 「清らかな優しさは美徳の光となって、どこまでも輝きを失わず」

座長 「美徳の光」

一市 「喜びのマントラが、森羅万象、まばゆく世界を照らすのだ」

座長 「世界を照らします」



太鼓。

一市 「私はね！お前たちが最後まで捨て去ることの出来なかった卑しく欲深な精神から早々に決別して、修業三昧。日々、精進の三学無碍さんかくむげ。六波羅蜜ろくはらみつを生涯実践し、徳

座長 を積み、拔苦ばつくく与楽よらくに人々を導いた末、極楽の世に招き入られたのだからね。苦のない世界はそれこそ、あの御方の胸に包まれる安らかな温かさそのものなのだよ」

「もはや何を言っているのか分かりません」

太鼓。

座長 「一市の肩をなでてやる格好）なかなかの受けじゃないか。皆様、お喜びだよ」

「馴れ馴れしく触るんじゃない」

座長 「すでにスター気取りです」

太鼓。

一市 「興奮して向かって行く）私をさらしものに！」

座長 「（スルリとかわして）更に盛り上がって参ります」

太鼓。

一市 「私の言うことは皆、作り話か戯れ言か」

座長 「（鞭）ここが地獄ということを、よく覚えておきやがれ。光り輝く世界と無縁の、飢えと渇きでさまよう運命の、毒を食らいて生きのびる、果てることなき時をついて。 （鞭）ここにお集まりの皆様は、何も特別な生涯をおくってきた方ばかりじゃありません。」

（太鼓。）

たいていはごく普通の。満たされることなき人生。極悪人などごくわずか。神、仏の世界を一度は信じ、命尽きた方々ばかり。ようやくすべてを終え、安楽の道を持つばかりのはず。 （鞭）それなのに、それなのに、

（太鼓。）

厳しい暮らしを耐えてすごし、いい思いなどほんのひと時、抑圧され、人と争い、病に苦しみ、身内に泣かされ、醜く老いて、みじめな最期を迎えた方々ばかり。幸薄く、苦難に覆われた一生を過ぎて来られた。 （鞭）それなのに、それなのに、

（太鼓。）

命尽き、気がつけば暗闇の中。子供時分から教えを受けた光輝くの世界などどこにもなく、手さぐりに歩いて出た先は渇きに苦しむこの世界。ここまで来てようやく騙されていたことに気づきます。 （鞭）あの話はみんな嘘かと。

（太鼓。）

あの夢のような世界へのいざない。浄土、極楽、彼岸、天界。安らぎと幸福に満ちたまばゆいばかりの世界。苦しみから解き放たれ、目覚めた者だけが往来する賢者ばかりの清浄聖地。この上ない輝きを放ち、喜びと美に満たされる。 （鞭）あの話はみんな嘘かと」

太鼓。

一市 「お前たちは諦めてしまったのかもしれない。しかしね、徳を積むという事は、つまりそういう艱難辛苦を乗り越えて、ようやく到達をするのだよ。永遠の生命を悟り、無限のつながりにその身を置けば、おのずと宇宙は一つにつながる」

座長 「嘆かわしい、毎夜毎夜の世迷いごと。こうやって私たち、散ざ言い包められてきました」

太鼓。

一市 「来てみればわかる。どれほどの差があるか。(わずかに指を開き) こんなもの。こんなものだよ。それを気づくか気づかないかなど。壁<sup>かべ</sup>なのだ、壁。分かるか、神聖でおごそかなこの境界を。そこに在する者はね、出来ることなら、皆がここへと上がってくることを望んでいる」

座長 「その話を信じるか」

一市 「信じられぬか」

座長 「信じられると思うか」

太鼓。

座長 「(鞭) 人生は見世物小屋。嘘と幻を真に見せかけ、淡き過ぎ行く夢また夢。一步、表にその身をさらせば、はたと気づく無限の世界。永遠の時をあてがわれ、死ぬことさえも許されず。望みを絶たれた人畜生のなれの果て。(鞭) あるのは、この世界ただひとつ。ここが最後の堕ちいく場所と諦めたからには、腹をくくるしかない。ここが地獄ということ、よく覚えておきやがれ」

太鼓、盛大に。

一市 「ここに漂うのは、末法の思想そのもの：願いを棄てた鬼畜の声だけ…。しかし、忘れてはいけない。世界が無常であることを。涅槃<sup>ねはん</sup>寂靜<sup>じやくじよう</sup>：寂滅<sup>じやくめつ</sup>為樂。煩惱の火を吹き消せ：さすれば生死を超えた安樂を迎える。あの御方の導く先に到達する世界は、今もさん然と輝いているのだよ」

座長 「(鞭) どうです、この根性。それでもまだ極楽世界の夢物語を続けます」

一市 「あの御方の教えには、それだけの慈悲と尊さが備わっているのだよ。そして、いついかなる時も、その御手は目の前に優しく差しのべられている」

座長 「どう言っても、あるというのですか。迷いも憎しみもない、そんな世界が」

一市 「そこでは誰もが、苦しみから解放される」

座長 「あるというのですか。信じた者が皆、救われる、そんな世界が」

一市 「そこでは誰もが、この上ない幸福に包まれる」

座長 「あるというのですか。安らぎで満たされた、そんな世界が」

一市 「そこでは誰もが、それは喜びに満ち溢れて」

座長 「(鞭) OH、マーズエラス。こいつは本当に重症だ」

座長、終了のポーズ。

太鼓、盛り上がり、そのままOUTしていく。

一市、崩れるように倒れ込んでいく。

暗転。

○村

溶明。

長、登場し、戸を叩く格好。

一市、疲れた様子で出迎える。

長 「今朝方また一人……」

一市 「行こう……今度は」

長 「幼い童わらわが……」

一市 「あの時のあの子か……私が初めて来た日に会った」

長 「そうです。あのハル坊が。この村で最後の子供だった。あの時のあの水が最後の……」

一市 「この世の楽しみというものを何一つ知らずに逝ってしまった」

長 「なあに、今頃は浄土の泉で好きなだけ美味しい水を……そうでございましょう」

一市 「浄土の水か……」

長 「苦しみのない世界には、およそないのでございましょう。病も渴きも飢えさえも」

一市 「(苦しげに) そうとも……。一切から解き放たれるのだよ。心の中にある清らかな優しさだけで包まれ、美徳の光となつて、どこまでも輝きを失わず。森羅万象、まばゆく世界を照らすのだ……」

長 「ありがたい。ありがたい。それであの子は救われた。御仏は必ずや慈悲をお与えに。それが唯一の救いです……。唯一の……」

一市 「そう、慈悲……救い……」

ヨシ秀、登場。

ヨシ秀 「準備が出来たそうだ」

長 「母親の様子は」

ヨシ秀 「ただ泣いてる」

長 「うむ……。私は一足先に。あれは家の親戚だで……(行こうとする)」

一市 「私もすぐに」

ヨシ秀 「待ってくれよ」

一市 「どうした」

ヨシ秀 「この世に意味のないことはねえ。そうでしたな」

一市 「ああ……」

ヨシ秀 「すべては必然」

一市 「そうだ……」

ヨシ秀 「だったら！見なよ、雨は未だに降らず」

長 「ヨシ秀」

ヨシ秀 「これにどんな意味が。いじめかい」

長 「馬鹿なことを。この罰当たりが」

ヨシ秀 「馬鹿なことかよ！」

一市 「何が言いたい…」

ヨシ秀 「あんたと同じこと」

一市 「私…」

ヨシ秀 「そう」

一市 「私が何を…」

ヨシ秀 「隠したってダメさ」

一市 「私は…」

長 「ヨシ秀！よさんか」

ヨシ秀 「これだけは言える。俺たちは日照りや病、目の前の艱難、この現実のありように苦しんでいる。でも、あんたは」

長 「やめろと言うのに！」

ヨシ秀 「あんたは自分自身の罪に苦しんで。むしろ安心するがね。これで平気だなんて言われたら…あんたは人間じゃない」

長 「ヨシ秀！」

ヨシ秀 「疑ってなきや嘘だ」

長 「(ヨシ秀に襲いかかる) やめろ！やめんか！愚か者」

ヨシ秀 「(何度も交わしながら) いつまで目を反らせば気が済む。見ろ。見ろって。次々に仲間が死んで行く。皆、泣きながら死んで行ってるんだぜ。渴きに苦しみながら、病に倒れて。あんたの教えた通りに経を上げて、心の底から祈りを捧げた。この世に意味のないことはねえ：笑わせるんじゃないよ！それでもこれを与えられた試験というなら、こうまでして俺たちを試す理由を聞かせてくれよ。雨を降らせねえのも教えか…容赦なく日差しをぶつけ、飢えと渴きで生殺しにするのも慈悲なのか…。馬鹿言え。そんな考えがどこにある。え！ここまで地獄を与える奴のどこが御仏なもんか！」

一市 「…」

ヨシ秀、長を振りほどく。

ヨシ秀 「安心するぜ。疑ってなきや嘘だからな」

長 「出ていけ！」

ヨシ秀 「ああ！出てってやるとも」

ヨシ秀、走り去る。

長、深々と一市に頭を垂れ。

長 「お許しください…どうか見捨ててください…ワシらは信じとります。どんな状況に置かれても、そこには教えがあることを。必ずあの御方はお救い下さる。ワシらは皆、言うとります。ワシらの苦しみは、きつとワシらに因がある。それでもワシらは信じとります。あの御方がワシらに御導きを与えて下さることを。ワシらは信じとりますから…」

長、退場。

一市、立ちつくしたまま。

一市 「私が…疑う」

照明、CHANGE。

○見世物小屋

けたたましい太鼓の音。

鞭を連打し、座長、登場。

盛り上がっている。

座長 「おかしいと思ったことは」

一市 「おかしい」

座長 「そう。おかしい」

一市 「私の話の何がおかしい」

座長 「だからつまり、お前さんのいたという所。本当にそこは極楽なのか」

一市 「どういう意味だい」

座長 「だから、その言葉の通りです。おかしいとは思わなかった」

一市 「私はね、生きてきた前の世界で、何百何千という人々に、先人から伝え教わった

浄土の様子を語り聞かせて来たのだよ。それが、その世界そのものが目の前に広がっていたんだからね。疑いようがないじゃないか」

座長 「しかしね」

一市 「絢爛たる美と安らぎの世界。天女の歌声に鳳凰が舞い、桜桃や沙羅双樹の花が咲

き乱れるきらびやかな楽園。それはまさに智慧と慈悲の光輝く聖域だったのだよ。

実際には口で説明が出来ぬほど、もっと素晴らしいがね。気がつくところこにいたわけだ」

座長 「そこにね」

一市 「そうだよ」

座長 「おかしいとは思わなかった」

一市 「何を」

座長 「だからつまり、どうして自分が極楽に」

一市 「どうして」

座長 「そう。どうして自分が、そこへたどり着けたか。おかしいと思わなかった。少しも」

「何だって私がそれを、おかしいと思わなくちゃならないのだね。私はこれまで、それは多くの成果を上げて、生きていた娑婆の時代を終えたのだよ。あの御方に帰依し、修業に明け暮れ、教えを広め、人々を救い、数えきれない程の喜びと感謝をされて」

座長 「それは何度も聞いたよ」

一市 「随分と出世もした。だからまあ、位の高い者しか経験できない様々な苦勞も、その度、乗り越えて来たのだよ。見事に。かなりの働きをしたと思うね。これ、言っておくけど自慢じゃないから。そりゃ、おこがましいといえはおこがましいよ。けれど、着いたんだから。そこへ。光り輝く浄土の世界に。もちろん、自分一人の力でここまで来られたなんて思っちゃいけない。周りの弟子たちには感謝しているよ。今でも（合掌）」

座長 「しかしね」  
一市 「まだあるのか」  
座長 「だって、おかしいから」  
一市 「だから、何が。何かおかしい」  
座長 「もしそうだとして、それが真の安らぎの世界だとして。その光り輝く聖域やきらびやかな楽園があったとして」  
一市 「あつたさ。あつたんだよ、まぎれもなく」  
座長 「それならどうして」  
一市 「何だい」  
座長 「未だにあの御方を見たことがない」  
間。  
一市、高らかに笑い。  
一市 「あの御方を」  
座長 「慕っていたわけだね」  
一市 「そうとも」  
座長 「生涯、想い続けて」  
一市 「ああ」  
座長 「教えを広め、尽くしに尽くした末のその世界で、恋い焦がれたその存在」  
一市 「その通り」  
座長 「なのに、未だに会ったことがない」  
一市 「そんな…」  
座長 「姿すらない。一度も。信じて疑わない。それなのに向こうは現れちゃくれない」  
一市 「(ようやく笑いをおさめ)だから、だから、それがどうしたというんだね。私はね、そんなこと何とも思っちゃいなのだよ。何ともね。そんな、見たことがないくらい。それが何だい。そんな小っちゃなこと。そりゃ、お見受けするにこしたことはないよ。しかしね、お忙しい身の上なのだから。それはもう常人では考えられないくらい」  
座長 「忙しい」  
一市 「お忙しいよそりゃ。森羅万象、すべての生きとし生けるものに御目を降り注いでおられるんだから。お前たちには分からない大変な苦勞をあの御方は。それにね、これはたまたまなのだよ。だからつまり、お会いしないのはね。巡り合わせというものさ。お会いするべき時がくれば、それはもう」  
座長 「会えると」  
一市 「もちろんだとも。今回の勤めを果たした後などは、ぐっと可能性は上がるだろうね。直々にお声なんか掛けて頂けるかもしれない」  
座長 「直々に」  
一市 「何せ大仕事を任されているのだからね。艱難辛苦は承知の上、こんな地獄の果てで一人の男を探すだなんて。これはもう私を、私という人間をすっかりご信賴頂いているからこそアレじゃないか」  
座長 「では、向こうはお前さんという人間をちゃんと見抜いて」

一市 「もちろんだとも。あの御方はね、何だってお見通しなのだよ。それはもう、つぶさにね、前の世界で私の一生を見ておられたんだから。信頼だよ。私にしてみれば、これ以上の喜びはないだろう。全身全霊をかけて、そのお心に応えようと精進している。時代こそ違えば直弟子だよ。間違いない」

座長 「するとつまり、お前さんとあの御方の関係は続いている。今でも」

一市 「当たり前じゃないか。我々は永遠の間柄なのだからね」

座長 「永遠」

一市 「そうとも。決して離れることなどありはしない」

座長 「それなのに偶然すらない」

一市 「だから、それは」

座長 「おかしいとは思わない」

一市 「何ひとつ！私たちの繋がりとというのは、いわゆるお前たちの言う、そんな甘っちょろい関係ではないのだから。それこそ人生をかけ、この身を捧げる壮絶な、真実そのものなのだよ。それらを乗り越えた末にようやくくたどり着いた真理や境地なのだからね。そもそも比丘とはそういうものなのだ」

座長 「おかしいと思ったことは」

一市 「まだ言うか」

座長 「疑ったこと」

一市 「あるわけがない」

一市 「揺らぐことも」  
「一瞬の刹那でさえ。それがお仕えするということ。帰依するということ。我々はね、いつだって固い絆で結ばれている」

座長、終了のポーズ。

照明、CHANGE。

## ○村

シタールの音。

一市、疲れ果て突っ伏している様子。

片隅にヨシ秀、立っている。

一市 「(勢いよく目を覚ます) あ……」

ややあって、一市、ヨシ秀に気づく。

ヨシ秀 「……」

一市 「いつから」

ヨシ秀 「随分になる」

一市 「また誰かの弔いか」

ヨシ秀 「いや」

間。

一市 「では……私を責めに来たか」

ヨシ秀 「へえ。何故そう思う」

一市 「今日も雨は降っていない…」  
ヨシ秀 「そうだな」  
一市 「それに…」  
ヨシ秀 「何だい」  
一市 「初めて会った時から、お前は私を受け入れようとは…」  
ヨシ秀 「ああ」  
一市 「聞いている。お前が以前は信心深い者であった事は。ここでは唯一、筆を持ち、菩薩や如来を見事に描いていたと」  
ヨシ秀 「その昔、立ち寄った旅の仏絵師から手ほどきを。だが、もう辞めたよ」  
一市 「様々な辛苦をなめ、お前をそのように変えたのは、巡り巡って私に因があるといえよう。確かにお前の言う通り、私の教えは何の力にもなっていない…」  
ヨシ秀 「(じつと見ている)…」  
一市 「言うがいい。お前のたけを私にぶつけよ。私は黙って聞いている…」  
ヨシ秀 「俺はただ拒んでいるんじゃない。問うているんだ」  
一市 「問う…」  
ヨシ秀 「そう。黙って問うている。(天を指差し) 真実か否か」  
一市 「やめよ。またそのような疑いの目であの御方を」  
ヨシ秀 「いや。俺は問い続けるね。黙って。そして見届けてやるのさ」  
一市 「ヨシ秀」  
ヨシ秀 「俺に説教はもう通用しねえ！。いいだろう、教えてやる。昨夜遅く、長の所に皆が集まった。生き残った者たちが、ある相談を」  
一市 「相談…」  
ヨシ秀 「昼間、清水の在り処が他所の村に知れた」  
一市 「大岩の湧き水が」  
ヨシ秀 「元々、一日で桶一杯にもならねえ水だ。それが元で小競り合いが。昨日はどうか蹴散らせたが、一旦、知られたからにはこのまま収まるはずも。向こうは必ずやってくる。だからよ、生きるか死ぬか。今日はこちらが総出で相手を襲うことに」  
一市 「何だって…！」  
ヨシ秀 「もちろん、あんたには黙ってな。皆、ここには寄らん」  
一市 「(慌てて出ていこうと) 決まったのは夜なのだろう。どうして、もっと早く」  
ヨシ秀 「入ることが出来なかったからな。こん中によ」  
一市 「何故だ」  
ヨシ秀 「俺が来たのは昨夜、遅く」  
一市 「(動きを止めて振り向く)…」  
ヨシ秀 「そう。見たぜ。あんたが、心の内を吐き出しているところ」  
一市 「あれを…あの声を聞いたと…」  
ヨシ秀 「確かに聞いた。あんたが一心不乱、天に向かって投げかけてた言葉。随分と乱暴に毒づいていたじゃないか。あの御方に恨みつらみを。最後なんてありや、ののしりといっても言い過ぎなんかじゃ」



一市 「(慌て)違う。よく聞け。あれは心の迷い…！ただの迷いに過ぎんのだ。善良で信心深い者たちが、来る日も来る日も死んでいくのを目の当たりにし、その無情の光景にこの私とて尋常な心持ちを保っておられず…。それが証拠に、最後は思い直して、再び気持ちを入れ替え、あの御方の慈悲にすがる心を取り戻したはず。その姿だってお前はちゃんと見たであろう」

ヨシ秀 「あれが一時の気の迷い。ふん…まあいいだろう」

一市 「そうだ。その通りだ。それしかあるまい」

一市、行こうとするが、足がもつれて転ぶ。

ヨシ秀 「(冷笑)どこへ行く気だい」

一市 「決まっている。皆の所に」

ヨシ秀 「止めれば俺たち死ぬんだぜ」

一市 「！」

ヨシ秀 「そういうことなんだよ。あの水がなければ、今日、確実に、誰かが干からびる。うちの村か、向こうの連中か…二つに一つ。どっちにしたって必ず死ぬ。どちらを選ぶかは、あんた次第だが」

一市 「いや、それでも…知恵を絞れば何か」

ヨシ秀 「あればとづくにやってる！何も変わらねえ。何も」

一市 「しかし、このままでは」

ヨシ秀 「それにな、言っとくがこれは二度目なんだ」

一市 「二度目…」

ヨシ秀 「ああ、二度目だとも。前にも違う村との間でいさかいが。そんな時だって皆殺しさ！だからこそ、今、俺たちはこうして生きていられる！」

一市 「(苦しげに首を振る)…何ということを」

ヨシ秀 「ようやく分かったかい。そうとも、あん時だって、皆、源宋様には知らせず」

一市 「何という…何という業を」

ヨシ秀 「何も知らぬ源宋様は、いつものように一椀の水を有難そうに飲み干したよ。美味い、美味しいと言ってな」

一市 「(苦しげに) あああ…」

ヨシ秀 「そして知った。村で何が起こっているのか。とうとう知ってしまった」

一市 「何という…残酷な」

ヨシ秀 「そうさ。知ってしまったんだ、何もかも。そして、その後、あの人はどうしたか。

吐いたよ…。今まで自分が飲んだ水を根こそぎ出すかのように、吐き出した。苦しんで。苦しんで。のたうち回って地面に吐いた。涙をこぼして。よじれた腹を両手で抱えて。それはもう、地獄絵図のように」

一市 「むごい…むごすぎる」

ヨシ秀 「だがな、あの人は決して俺たちをとがめなかった。むしろ全てが自分の仕業のよう。苦しんで…苦しんで…苦しんで…そして…旅立ったのさ！谷の祠<sup>ほこら</sup>へね。一人。即身仏となるために…」

一市 「何ということだ。何ということをお前たちは…」

ヨシ秀 「けどよ、俺が言いたいののはそんな事じゃねえ！俺が言いたいののは、言いたいののはな、それでも何も変わらなかったってことさ！慈悲だの救いだの、あんたらは偉そうに言ってやがるけどよ！何も変わらなかったんだ。何一つ！」

一市 「…」

ヨシ秀 「俺は何も言わねえ。黙って、黙って…黙って見届けてやる…」

一市、静かにヨシ秀に向かう。

一市 「(ヨシ秀の肩を掴み) 見届けるがいい」

ヨシ秀 「離しやがれ」

一市 「帰って村の者に伝えよ。あと三日…いや、二日でいい。待つのだ」

ヨシ秀 「あんたが雨でも降らせる気か」

一市 「私ではない！あの御方が」

ヨシ秀 「(離れる) だからよ！もう沢山なんだ！」

一市 「(再び掴み直し) いいや！お前に…皆に、答えを見せてやる」

ヨシ秀 「離せ」

一市 「いいから聞け！今のこの在り様はあの御方が出された結末ではない。そうだ。源宋様の懇願はまだ道半ばにあるだけ。未だあの御方の元にはたどり着かぬだけなのだ。それに違いない」

ヨシ秀 「(ようやく振り解き) どうしようっていうんだい」

一市 「私もあの御方の所へ…。即身仏に」

ヨシ秀 「あんたが」

一市 「源宋様の後を追ひ、共にあの御方へ直訴する。もう何日も一日一椀の水以外含んでおらん。この炎天下に身をさらせば残った血まで干からびよう。谷の祠まで山を登って二日、もはや、その後一日ともつまい。いいか、すぐに皆へ伝えよ。必ずやあの御方の慈悲の力を以て我らの願いを聞き届けていただく」

ヨシ秀 「無駄さ。そんなことしたって」

一市 「そんなはずはないのだ！そんなはずは」

ヨシ秀 「じゃあ、もし…それでも何一つ変わらなかったら」

一市 「(睨みつけるように顔を近づけ) よかろう…その時こそは、それを答えと思え」  
問。

ヨシ秀 「面白れえ」

ヨシ秀、去る。

蝉の声、殴りこむ。

## ○谷の祠

照明、CHANGE。

シタールの音。

一市、言葉にならない経をつぶやき周囲を歩き出す。  
やがて、精魂尽きて倒れ込む。

一市 「(こ)か…」

肩で息。

暫くあつて、上体を起こし、辺りを見回す。

一市 「源宋様の…最後の場所」

見回しながら辺りを這いまわる。

やがて、座ったまま岩にもたれかかり、動き止まる。

一市 「もう、探す力すら…」

肩で息。

一市 「源宋様…源宋様…私もついにこの場所へ…。これ以上絶えられません…。私は…逃げ出してしまったのです！恐ろしくて…自分が…恐ろしくて…。(肩で息)私は何も出来なかった…。あの村で…何一つ。村中の者が苦しみながら死んでいく。それでも彼らは…あの御方の力をひたすらに信じ続けて…。目の前の世界は何も変わろうとはしないのに…。苦しみが消え去ることがないのに…。それでも彼らはあの御方にすがって…。(肩で息)来る日も来る日も繰り返される彼らの苦しみを目の当たりにしながら…私は…私の中で芽生えた心をはっきりと感じました。そして、とうとうそれを…心の声を口に…。(苦しみながら絶叫)「何故です！」…「あなたという存在は…本当に…本当に！」(肩で息)お分かりでしょう…。私は…あの御方を…あの御方の存在を…。私は恐ろしい…。自分の心が恐ろしい。だから私はあの村から…。これ以上絶えられなくて…もう…」

一市、力尽き倒れる。

蝉の声、圧倒的に。

男、登場。

竹筒の水筒を一市の口に当ててやる。

一市、咳き込みながら正気に戻る。

一市 「(男をじつと見て)…」

男 「(一市をじつと見て)…」

一市 「源宋様…」

源宋 「お前も来たか」

蝉の声、STOP。

暗転。

## ○白の世界

### ※(2)※

甲高い天女のコーラス(極めて大らかな音程をつけた阿弥陀経)。

一市、目を覚ます。

辺りを見回すが誰もいない。

鳥の鳴き声のような笛の音。

一市 「鳳凰？」

静かに太鼓の音。

一市 「風に揺れるあの木々は…沙羅双樹」

一市 「死んだのか…私は」

間。

鳳凰の鳴き声、更に高まり。

一市、嘖きこぼれる笑い声。

一市 「私の聞いた…私の伝えた…教えの通りの世界ではないか」

眼に入るもの、すべてを次々に追って行く。

一市 「金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀にシヤコ、メノウの地からなり…金銀の花や果実、功德の備わった清浄な水…無上の輝きに満ちた水浴のための池の数々…きらびやかこの上ないこの姿…目まいを覚えるほどのこの壮麗さ…間違いない。間違いない。間違いないではないか(笑)」

蜘蛛、登場。

糸紡ぎを始めだす。

一市 「(気づき)…誰」

蜘蛛 「蜘蛛です。銀の糸を出すあの蜘蛛です」

一市 「ここには長く」

蜘蛛 「そう、暫くになります」

一市 「一寸、聞きたいのだがね」

蜘蛛 「何です」

一市 「この景色からみて間違いようもないのだけれどね」

蜘蛛 「ええ」

一市 「天上だね、ここは。つまり極楽の」

蜘蛛 「…」

一市 「いや、何ね、私もね、随分と教えてはきたけれど、これほどまで絵に描いたような同じ姿だとは…正直。いや、自信がなかったとか、そういうアレじゃないけれど。ただね、ひたすらに感動をね。だって、そうじゃないか。これだけ一致した光景を目の当たりにするとは」

蜘蛛 「ここは天上じゃありません」

一市 「え…」

蜘蛛 「極楽なんかじゃありませんよ。まだ」

一市 「だって…お前！あれは…沙羅双樹や天女の声は」

蜘蛛 「天女…」

一市 「鳳凰の姿も。違つかね！」

蜘蛛 「見えますか。そんなもの」

一市 「見えるも何も、ホラ、あそこ」

蜘蛛 「どこ」

一市 「だから、あそこ…」

蜘蛛 「あれは、あなた…」

背後からうめき声、聞こえ出す。

照明、CHANGE。

紗幕の奥に亡者の群れ。  
天仰ぎ、手をかざしながら苦しみの声を上げている。  
蜘蛛、一市の背を押す。

一市 「(悲鳴) あああ！」

一切の音、消える。  
暗転。

### ○岩屋

遠くで蟬の声。

溶明。

一市、目覚める。

惠蓮、登場。

腕の乗った盆を手に行っている。

一市 「(驚き) 誰…」

惠蓮 「黙々と腕を勧める」…

一市 「私に…」

惠蓮 「黙々と腕を勧める」…

一市 「お前は一体…」

源宋、登場。

源宋 「この家の主。今はただ一人」

一市 「ああ…やはりあなたは！」

源宋 「(じつと見つめて)…」

惠蓮、源宋に近づく。

源宋 「花だけは供えておいたよ。望み通りに」

惠蓮 「(何度もお辞儀)…」

一市 「あなたが…何故。ここに」

源宋 「…」

一市 「何故…。何故です！即身仏とおなりのあなたが…」

源宋、一市の側に座をとる。

一市 「源宋様」

源宋 「いつか誰かが見つけると。お前だったとはな。あそこへは滅多に近づくこともな

かったのに。食え」

一市 「何故なのです」

源宋 「聞いてどうなる。一度、死んだ人間が」

一市 「死んだ。私が」

源宋 「逃げて来たのだろ。あの村から一切に耐えきれず」

一市 「(頷く) そうです…」

源宋 「それなら一度、お前は死んだ。少なくともあの者たちの中で」

一市 「私が、死んだ…」

源宋 「食べ。食わぬなら下げる」

一市 たまらずかき込む。

咳き込む。

源宋 「まだある。食うか」

一市 「咳き込みながら」出来れば水を…」

源宋 「(腕を差し出し)頼む」

惠蓮、腕を持ち、退場。

一市 「ここには何故、こんなものが」

源宋 「…」

一市 「水に、ヒエやアワまで…」

間。

源宋 「今の女」

一市 「ええ…」

源宋 「口がきけん。子供時分に喉を切られて」

一市 「誰が…そんなひどいことを」

源宋 「あの村の連中だよ」

一市 「あの村の」

源宋 「この家の者は仕打ちを受け、追放された民」

一市 「追放…罪人なのですか」

源宋 「飢饉の年に盗みを。あの女が飢えて死にかけたのだ。見るに見かねた父親が年貢倉に忍び込み。それを繰り返すうち他の者に知れた。一家ごとく村中を引きずり回され、死ぬほど痛めつけられたあげくに、あの祠へ捨てられた。まさか、生き延びることなど考えもせず」

一市 「…」

源宋 「一家総出で深山を分け入り、ひん死の中、ついに泉を見つけ出した。その後、わずかに残る土地を掘り起こし、自然に生えたヒエ、アワを集め、丹念に増やし続けた。二十年をかけて」

一市 「二十年…」

源宋 「その間に、幼い妹が死に、弟が死に、祖父母も母親も皆死んだ。確かにここには食いものがある。水もある。罪人に堕ちた一家が懸命に生き抜いて残した命の証。昨日、最後に残った父親もとうとう死んだ」

一市 「…」

源宋 「様々な境遇で色とりどりの生き方がある。世情がある。悪の中にも善はあり、善の中にも悪はあった。見る立場でいくつもの悟りが存在するのなら、それはもはや真理とは呼べぬ」

一市 「源宋様…」

源宋、立ち上がり。

源宋 「(指差す)あれを」

一市 「村です…あなたと、私のいた」

源宋 「違う。もつと先。あの山のまだ向こう」

一市 「(目を凝らして見つめる) …」

源宋 「見えるだろう」

一市 「雲…ですか」

源宋 「そう。あの黒い雲。雨雲だ」

一市 「雨雲…」

源宋 「この季節、あの辺りは何ヶ月もああいっただ様子で日に一度は雲が立つ。しかし、あの山まで流れ着いてぶつかると、雲はたまり、やがて消える」

間。

源宋 「あれこそ、この世の現実そのもの。あれこそが真理なのだ」

一市 「現実…」

源宋 「私がここへたどり着いた時、己の気持ちとは裏腹に何日も命尽きず生き長らえた。絶望だけの空しい時が過ぎ、焼けつく日の下でこれまでの不甲斐なさを呪う最期。力果てる時ばかりを待った。そんな、死に手をかける私の目の前に、あの黒い雲の中のせん光が映り込んできた。夕立。薄れいく意識の中で、それが稲光りであることに私は気づいた。あそこには恵みの雨がある。毎夕、空が赤く燃え上がるころあいに、我々が命の限り乞うた生きるしずくがあそこに。私の中ではつきりと何かが音を立てて崩れるのを感じた」

一市 「源宋様…」

源宋 「この世のすべてには意味があり、仏の道ですべてが救われると教えてきた人生。仏の慈悲がすべてを司ると導いてきた生涯。何故、今際の際にこの現実を知らせたのか。何故、それを気づかせたか…。意識のなくなる寸前まで、私の心はその答えを探し求めた。しかし、あの雲の行方を見よ。これこそがすべてを物語っているのではないか。間違っていた…自然の現象に意思などないのだ」

一市 「待ってください：それは…あなたの仰るうとしていることは」

源宋 「この世はただ流れいくまま。時がただ流れいくだけ。命の息吹は移りゆくのみ。自然の移ろいは意図や啓示など持たぬ。そこに意味などありはしない」

一市 「待ってください。それが、それが空ではありませんか。一切にとらわれず、あの御方の慈悲のあるまま。諸行無常や諸法無我の教えそのものではないですか。時の移ろい行く一瞬一瞬に、決してやむことのない流転の世界観。永遠不変の実態はない刹那無常の世界観。それがやがて、涅槃寂靜と到達していくのでありましょう。それがまさしく」

源宋 「(きっぱり) いや。空はそれそのものも空と説く。私の言うのはまさにそこから外れている。現実を認めているのだよ。ありのままの存在を形あるものとして、あるがままに。分かるだろう。私は執着を受け入れたのだ」

一市 「ああ…ああ、あなたという人は…」

源宋 「私が経典をいくら唱えたところであの消えゆく雲に山を越えさせることなど出来はしない。そのような力はどこにも存在しない。私の教え論してきた万物の幸福など、始めからありはしなかったのだ。始めから。そうして、私は気を絶えた」

一市 「(大きく頭を振っている) そんな…」

源宋 「気がつくと、私は今のお前のように粥を口にし、命つなげたことを知った。私を

生かしたものは、この目に触れる現実の世界、この手の中に盛られた椀一杯の粥。私ははっきり己の敗北を知った」

一市 「大きく頭を振っている」…」

源宋 「あり得べからざる力があるとばかりに説いて聞かせ、降るわけのない雨を乞い続けた愚かな自分。後からこの家の者に聞けば、数年前の大地震で平野の地形が変わり、山から湧く風の向きが転じたという。村に雨がなくなつたのもその年から。救うどころか、私は人々を路頭に迷わせた。万民の幸福が行きわたらぬ私の信じた教えなど、粥一杯にも満たぬ」

惠蓮、椀を手にして再び、登場。

源宋 「飲め」

一市 「…」

源宋 「様々な境遇で色とりどりの生き方がある。真理がある。今、お前を救うものは、ここにあるこの椀一杯」

惠蓮、一市に椀を渡す。

源宋 「私の気が絶えた時、この女が粥を食べさせ救ってくれた。私はこの女から新たな命を授かった。新たな命、新たな世界」

源宋、惠蓮を引き寄せる。

源宋 「妻だ。私は教えを捨てたが、生きていく新たな力を得た」

一市、手から椀がこぼれ、激しく動揺する。

源宋 「生きていくこと。私の身に常に寄りそう現実の世界。私は生きる執着を受け入れた」

一市 「あ…あなたは今…教えを捨てたと…！」

源宋 「捨てた。必然を否とした時から、私はすでに教えを捨てている。この世のあらゆる存在に意味などなかった。幸も不幸も、光も闇も、富や貧しさ、徳と罰、この世に起こることは、ただ時のからみ合い。この世に起こる様々な出来事は、ただ偶然の重なり合い。黒い雲と粥一杯。それが私の世界観。それで十分」

一市 「(激しく肩で息) まさか…まさかあなだが」

源宋 「この世に御仏の力などない。ありはしない。未練もない」

一市 「源宋様…源宋様…」

源宋 「私は教えを捨てた。しかし、私はこれを、お前に無理強いするつもりはないよ。これは私が受け入れた私自身の世界そのもの。私は一度死に、新たな命を得た。そうして新たに生まれ出た世界には、今までにない別の生き方が広がっていた。私はただ、それを受け入れた…。お前の師と仰ぐ源宋は、もうこの世にいない」

一市 「(項垂れている) そんな…」

間。

源宋 「あの祠の近く、この家の者が眠る墓がある。昨日はそこへ父親を運んだ」

一市 「…」

源宋 「近く、我々はここを出る」

一市 「ここを…」

源宋 「奥の泉が枯れた。この夏を乗り切ることさえできなからう。たくわえた水も残り



わずか。少し前から予兆はあったのだ。だから話し合っていた。ここを出るより道はないと」

一市 「山を…下りるのですか」

源宋 「いや。この家の者があの村に戻れば再び殺されよう。今となつては帰る場所もない」

一市 「では、どこへ…」

源宋 「都へ出る」

一市 「都」

源宋 「そこで新たな人生を」

一市 「都…。ここから、たどり着けるのですか…」

源宋 「賭けには違いない。この山を越えて幾日かかるか、身体はもつか。しかし、ただここで死を待つより、生き進む道を選ぶ。それが、この現実の世界に生きるただ一つの真理」

一市 「…」

源宋 「お前も来るか」

間。

一市 「行きます」。

源宋 「(立ち上がり) む。それしかあるまい」

一市 「私にも…新たな人生が」

源宋 「それが見つかればな」

一市 「新たな人生…新たな世界」

源宋 「眠れ。数日うちには出立する」

源宋、恵蓮と共に退場。

一市 「新たな人生…新たな人生…新たな人生」

照明、CHANGE。

### ○見世物小屋

座長、登場。

座長 「目で見たことだけを繋ぎ合わせていくと物事、明るく見えてくる。憶測や願望を捨て、起こったことのみ無感動に並べていくと、世の中、真理が顔を出す。目で見ただけのものがすべて。起こったことのみが真実。哀れぶ思いやりを加えることや分別や情けを付け足すことなど、この際、必要ありません。さあ、ここでお客様をお招きしましょう。前の世界では並を超えたご親密さで、その暮らしぶりをつづきに見て来たというこの御仁。本当の姿を知るには、この方において他にはありません。お入りください！粹すいな―墮天使！」

派手なお囃子。

十郎、登場。

座長 「さあさあさあ、ようこそおいで下さいました。さあ、こちらに。どうぞようく」

十郎 覧になつて。じっくり眺めて下さいましよ。どうです、間違いはありませんか」

座長 「確かですか」

十郎 「そりやもう。一目見てすぐに」

一市 「誰」

座長 「忘れてもらつちや困ります」

十郎 「私です。都でお別れしてから随分に」

一市 「都…。何だい、この男」

十郎 「お互い最後はひどい目に。(首を斬られる格好)えらい思いをしましたからな(笑)」

一市 「この男、何を言っている」

十郎 「何、恨んじやいません。あんた様のお陰で、実に良い思いをさせて頂きましましたから。たとえ短い間でも」

一市 「何を好き勝手なことを。私はこんな奴知らない」

座長、一市に鞭。

座長 「色々と教えて頂きたいのです。まずはそもそも出会いから」

十郎 「そうですね。出会いといつたら、これ、都です。と、言つても外れの。洛南の門からそう離れてもいない荒れた空き寺。訳あつて流れて来た下人だの放免罪人だのが夜露をしのいでうろつく、そういった巢窟みたいなやぶれ屋でしたな」

座長 「随分と落ちぶれた暮らしを」

十郎 「お連れの夫婦は、近所の童に僅かばかりの手間賃で手習いを始めましてな。最初のうちはこの方も大人しくそれを手伝つて」

座長 「ほう」

十郎 「しかし、半年、一年と過ぎるうちに、何と言いますか…こう、顔つきが変わつて。スレたとしても申しますか。すっかり世間様を睨みつける淀んだ目に」

座長 「性質が変わりましたか」

十郎 「そういつた匂いはホラ、アタシどもも敏感ですから。その住処の片隅で開いた賭場なんかを覗いているのを見て、何となく話しかけてみたんですな。するとこれ、いきなり自分にも何か稼ぐ方法はないかと身を乗り出してくるじゃありませんか。それでもまあ、こちらとしては、アタシどもなんぞにお尋ねということとは、どういつた類の稼ぎ方かお分かりの上でお聞きなんでしょうなと念を押しました。すると、すっかり座つた目をして頷かれましてな。翌日からはアタシどもについて歩くように」

一市 「何なんだこの男、何の話を」

座長 「(鞭)どうぞ、続けて」

十郎 「ところが、どういうわけだかこの方、何をやらしても手つきがいい。一度手本を見せれば大抵、器用にやつてのけて。アタシらより上手くやるなんてことも度々ありましたな。持つて生まれた…というやつなんでしょう。アタシたちに指図を始めるようになるまでにそう時間もかからなかったかと記憶しとります」

一市 「何をそんな。でたらめばかり」

十郎 「(笑)でたらめでも何でも。アタシらいつだって一緒だったじゃないですか」

一市 「知らん。私は知らんよ、こんな男」  
十郎 「よくこういうこと言いました。最後、首はねられる時にも」  
座長 「お気の毒な」  
十郎 「いいええ。何せこの方、頭がいい。いつだって、己が生きる道を迷わず算段なさる。そこにね、アタシは惚れ惚れしたもんだ」  
一市 「私は前の生涯でお前のような者を側に置いた覚えなど。悪党の片棒に仕立て上げようなどと無礼にも程が」  
十郎 「片棒なんかじゃありません。あんた様が親方、アタシが子分。何でも言うこと聞きました」  
一市 「尚のこと、人聞きの悪い」  
座長、一市に鞭。  
十郎 「それは鮮やかでしたよ。何を企む時でも。情けもなければ無駄もない。惹きつけるんですな。そういうところが、少なくともアタシには。まさに魔性の魅力というやつで」  
座長 「天性ですか」  
十郎 「しかしね…どうもこの方、何と言いますかひとつ…人望がその」  
座長 「ないんですか」  
十郎 「ええ、困ったことに。この方この調子でホラ、いつだって上からくるでしょう。物言い一つとつてみても謙虚さ遠慮の欠片もない。相手が傷つこうとお構いなしだ。だからホラ、何やかやと皆から煙たがられましてね。結局、誰とも折が合わず、一人また一人と離れていく。終いにやとうとう誰も近づこうとしなくなつて」  
座長 「そいつは始末に悪い」  
十郎 「しかしね、アタシは違う。ピンと来たんだ。この人から他の連中とは違う、匂いと影を」  
座長 「匂いと影」  
十郎 「何というか…その…妖しい色気に。何かをやらかしそうな。何かに化けてくれそうな」  
座長 「惚れ込んだ」  
十郎 「そういうことです」  
座長 「で、その予感」  
十郎 「見事に」  
座長 「的中ですか」  
十郎 「こつちの予想なんてはるかに超えてね。そりやもう次から次へこの人の思いつきは面白いように当たつちまう。物一つ売らんでも、自分の手は汚さず下人を使い上米をはね、そうして、利だけを増やしていく。闇品のさばき、金貸し、物売りど、あの頃、都で出来ることは何でもやったが、この方にかかれればそれらことごとく大化けするんで」  
座長 「随分、悪どく儲けたわけだ」  
一市 「おい、待てよ。本当に一寸、待ってくれ」  
座長、一市に鞭。

十郎 「それでも、始めは随分、泥嚙んで辛抱した時期もありましたぜ。稼いでも稼いでも、洛中の輩相手じゃたかが知れてますからな。なかなか浮かばれる気配もなく悶々として。目つきだけをギラギラとさせとりました。イラついてましたな。誰にしろるか…世間か、それとも宮中の殿上人か。しかしそれがね…まさにあの時、あの日が来るまでは」

座長 「あの時」

十郎 「そうです。あの時。あれですべてが化けたんです。とうとうこの方、黄金の宝を引き当てました。たどり着いたんです。あの商いに」

座長 「あの商い」

十郎 「ええ。この方がすべての流れを変えた、天台鳥薬売りでてんだいりやくございますよ」

照明、CHANGE。

○都

うら寂しく聞こえる琵琶の音。

手持ち無沙汰に一市、立っている。

惠蓮、登場。

着替えの支度を整えている。

十郎、人懐っこく近づいて。

十郎 「旦那は今日も治水の守を」

「…」

十郎 「正月もまだ二日だというのご苦労なこった。どうしてこの寒空に土のう積みなんざ引き受けちまうんだろうか。この空つ風に冷水を浴びて流行り病にでもかかったら。姐さんも気が気ではありませんまい」

「…」

十郎 「どうです、アタシらの手伝いで小遣い稼ぎなど。金貸し、物売り、手広く商いしておりますが…何、心配などしなくとも、かつらの毛づくろいやなんかの汚れる仕事を旦那にさせようなどとは。(懐から小袋を取り出し) こいつです。この薬。この妙薬が今、馬鹿売れで」

「…」

十郎 惠蓮 「西は蓬莱山のふもとにだけで採れるという、それは貴重な草の実を、山伏が三年寝かせて煎じたものを今回、特別に取り寄せて、ありがたいお経を唱えた後、皆様方にお分け致します。口に含めばたちどころに万病に効くこの薬。これこそがかの有名な天台鳥薬。靈験あらたかなる命の泉にございます。(笑) 実のところは、その辺りに生えたアシヤケシの実のくずをこねくり回しただけの代物なんだが、通りの端でも並べて売ればコレ、日によっちゃあるだけ売れちまうほどの評判の品。こいつはね、お経を唱えてやるってところが味噌なんです。そこで自宅の旦那にその気になってももらえりや、今の倍、数をこさえて売りさばけると、こう…」

惠蓮 「…」

十郎 「兄貴よ、アタシやすっかり姐さんに嫌われちゃってら」

一市 「やめとけ。お前のくだらぬ儲け話なんぞ、右から左だとよ」

十郎 「そうですかい。実に惜しい話だなこりや。金なんでものは儲けられる時に形振り構わずかつ込んじまうのが道理だというのに。姐さん、遠慮などはなさらずに、いつでもお声を掛けてくださいましよ」

一市 「さあ、いつまでも油なんざ売ってねえで、早く売り子たちを見回らないか」

十郎 「ええ。ええ。そうでした」

一市 「この間みたいにな上を撥ねる野郎が現れたら、情容赦はいらないよ。見せしめに指の一本や二本詰めちまえ。甘やかしたらきりがないんだ、下人なんてものは」

十郎 「そりやもう。そういうことにかけちやアタシは兄貴よりうんと年かさだ。泣こうがわめこうが容赦しねえよ」

一市 「分かっているならさっさと行きな。稼ぎを怠けちや蔵は建たない」

十郎 「全くだ。それじゃ。ね、姐さん」

十郎、退場。

聞こえている、琵琶の音。

一市、懐より髪束を出して放る。

一市 「筆にでもお使いなさい」

惠蓮 「…」

一市 「どうせ、かつらじゃ使えそうにない不揃いものまだら髪だ。童相手の手習いなら、そんなものいくらあっても足りんでしょに」

惠蓮 「…」

一市 「このところの寒さで、屍を放る奴が増えて仕方がない。お陰でこちらは人手を増やしても問屋の卸が追いつかず、笑いが止まらないんだが…。どうしたんです。いらなんでしょうか」

惠蓮 「(拾おうとせず)…」

一市 「どうやら、私もすっかり嫌われたようだ」

聞こえている、琵琶の音。

一市 「知っていますか、困いの向こうの大饗<sup>おおみうけ</sup>。正月中、雅の連中は賑やかにおどけて」

一市 「…」

一市 「何でも日に六度も食事の入れ替えがあつて、その度、外へ残り物を捨てるんだと。そいつ欲しさに御所の周りは人がたかつてしようがない。検非遺使<sup>けびいし</sup>の役人が放免連中を使って、毎度、乱暴に追っ払うんだそうだが、ま、それでも集まる数が減ることなど」

惠蓮 「…」

一市 「(琵琶の音に)煩せえぞ！しみたれた音ばかり流しやがって。畜生め！ここじゃ、辛気臭い琵琶の音しか聞こえない」

惠蓮 「…」

一市 「(琵琶の音に)煩せえぞ！しみたれた音ばかり流しやがって。畜生め！ここじゃ、辛気臭い琵琶の音しか聞こえない」

問。

一市 「(髪の束を見やり) しまっておきなさい。それだつて今時、タダじゃない」  
惠蓮 「(拾おうとせず) …」

源宋、奥より登場。

源宋 「どうやらそのまま眠ってしまったようだ」

惠蓮、包みを差し出す。

源宋 「すまんな。用意してしてくれたのか」

惠蓮、身振り手振り。

源宋 「ああ。このまま作業場に戻るよ。一昨日の風でね、橋がなぎ倒されたままなのだ。子供たちはお前が面倒をみてやっておくれ。皆、書き初めを楽しみにしていたからな(行こうとする)」

一市 「朝方戻ったばかりで、もうお出かけに」

源宋、床の髪の本束を見つける。

源宋 「また死人から取ったね。これだけあれば一人や二人ではきかんだらう。物乞いを集めて取って来させたか」

一市 「かつらをこしらえるには、やはり人の髪が一番と申しますからな。生業にする者も皆、ここから。どうせ放つとけば、屍は盗人が身ぐるみ剥がします。あとは検非遣使の連中が焼き捨てにまわるだけ。何、持って来た者には相場より高く買ってやります」

源宋 「お前もすっかり都に染まった」

一市 「(冷笑)今のこの都に三年も住めば、人殺しに落ちぬだけでもまだマシというもの。それに、仏門に背を向けた私以上に、善からぬ某もございましょうか」

源宋 「お前はよほど落胆しているようだね」

一市 「私は都にさえたどり着けば、これまでの過去から解き放たれて、それは心安らかな生活を送れるとばかり。それがどうです、この有様」

源宋 「お前には紗弥より授けた学がある。私と一緒に治水の指図を手伝ってみることで、それともまた以前のように、子供らに手習いしてみることで」

一市 「お言葉ですがね、私は人夫と一緒に泥にまみれることも、銭すら払えぬ童の相手をすることも真つ平御免なんです。そんなことをして一体、何になるというんです。毎日毎日、この洛中で寒空に腹をすかせて、一向に暮らし向きの良くなる兆しすら」

源宋 「そうか。それならそれで」

一市 「お聞きなさい。囲いの外で鬱々とする琵琶法師の音。あの物乞い法師と囲いの中の殿上人、もはや今の私の目からは同じ人の子に見えません。都にいと嫌というほど思い知らされる。人間なんてものは、低い身分で生きれば謂れない粗末な扱いで一生暮らさなきゃならないものだし、高い身分で生まれりゃ、放っておいても誰かがお膳立てしてくれた道のりを疑いも知らずに歩き行ける。昔はそれを無常と教えたものだったが、それは私が本当の世間というものを知らなかったからこそ言えた幼い夢の世界。自らで頬を打ちつけ現実を覗き見すれば、実のところは根が深い。まるで不動の大岩を一人で動かそうとしているようなものだ。」

生まれが追いつかないなら、せめてせいづらの中へ潜り込み、かさ張る肉をみんな吸い取ってやらねば。私はね、こんな身分の低い暮らしから、何としてでもあの囲いの中へ潜り込んでやりますよ。あの御殿の中へ。今に大きく当てて、必ずや人の羨む高貴の暮らしに見事咲き誇ってみせます」

源宋 「そうか。それならそれで」

一市 「いいんですよ。私のことなど、いつでも見限って頂いて」

源宋 「新しく生き返った人生。お前の心が望むのなら、私はそれで本当によいと思っ  
ているのだよ。(行こうとする) 気が変わったのならいつでも。治水の守はこの後何  
年もかかる」

一市 「何故です!」

源宋 「何故…」

一市 「今さらどうして治水の守なのです! あなたは一度死んだと言って、教えを捨てたと吐きながら、この地に着けば民に囲まれ身を粉にしている! 何故です。それがあなたの新しい真理ですか」

源宋 「私は流れ行く日々を、川を直し、橋を架け、子らに読み書きを教えてさえいればそれでよい。他意などないよ」

一市 「そんなことを言って。本当のところはどうなのです。ただの食いぶち稼ぎじゃありません。罪滅ぼしのつもりですか。どうなんです。仏を捨てた未練がまだ」  
源宋 「そんなものはない。まるでね。この世は日々が過ぎ行くだけ。私にはそう映っている」

一市 「この三年、その言葉を何度聞いたことか。それが本心だと。心の底から本当に」  
源宋 「本心だ」

一市 「真を仰い。その瞳の奥に何を隠しているのか。何故です。何故なのです」

源宋 「全体、お前の怒りはどこからくるのか」

一市 「馬鹿な…私に怒りなど!」

源宋 「兎に角、都に着く前お前に語ったあの山での出来事。私の考えはあれより何も変わりはないよ。未だにね」

一市 「相変わりもせず同じ答えを…。それならいい。それなら…。お行きなさい」

源宋 「行くかね、一緒に」

一市 「言っただけでしょう。私は真つ平だつて」

源宋 「そうか。それならそれで。(惠蓮に) 日暮れには帰る」

源宋、退場。

再び聞こえてくる琵琶の音。

暫くうつむいていた一市、落ちた髪のを束を拾って惠蓮に近づく。

一市 「(髪を差し出し)…」

行こうとする惠蓮。

行く手を阻む一市。

一市 「よう。姐さんよ、あんたは今の暮らしに満足かい。あれだけの思いをしてようやくたどり着いた都だつていうのに、毎日、疫病えやみにおびえながら食うや食わずの生

活をして。洛中には死人が溢れ、生きてる奴らにしたって盗人も平民も変わりやしない。皆、何かしら拾って食いぶちにありつくだけの日々。そうでない者といったら…囲いの中の連中だけだ。そこからあぶれた者は一生、目の目を見ずに死んで行くのさ。姐さんよ、このままじゃ私たち、そこから漏れたただの一絡げらしいぜ」

一市、徐に恵蓮の手を握る。

一市 「どうだい、いっそのまま私と落ちるところまで落ちてみないかね」

恵蓮、乱暴に一市を振り払う。

一市、再び向かって行く。

一市 「手を噛まれ」痛い！」

恵蓮 「…」

一市 「(近づく) 何しやがる」

恵蓮 「(空文字) …」

一市 「煩せえ！何が源宋様だ！夜な夜な人の心を悶々とさせやがって！来い！さあ、来いったら！」

琵琶の音、激しくなり。

一市、恵蓮を捕まえてからみつく。

一市 「私はもう怖い物なんてないんだ。怖い物なんて！」

一市、完全に恵蓮を抑え込み。

恵蓮、もがき続けて、腹を蹴る。

一市、まともに入った様子でもがく。

一市 「(再び捕まえようと) 野郎！」

恵蓮、奥へと逃げる。

一市、腹を押さえてせき込む。

虚しく響く、琵琶の音。

一市 「(地面を叩き) 畜生め…！」

十郎、飛び込んでくる。

十郎 「兄貴！兄貴！」

一市 「煩せえ」

十郎 「逃げろ！逃げるんだ、兄貴」

一市 「どうした」

十郎 「とねり舎人の連中が兄貴を探してやがる」

一市 「私を！」

十郎 「こっちの顔を見るなり追っかけてきた。走りすがら背中に聞こえたのは兄貴の在り処はどこかという叫び声。かなりの数で血眼になつてら」

一市 「どうして私を」

十郎 「分からねえ。だけど連中の先頭に小僧がいやがる。あれはこの間、薬を売った小僧だ」

一市 「くそつたれ！あの薬で腹でも下しやがったな」



十郎 「もうそこまで来てる。逃げろ、兄貴」

一市、逃げようとする。

家来たち、登場。

十郎 「しまった……！」

右往左往する十郎。

一市 「騒ぐな。落ち着け」

十郎 「(震えあがって) 兄貴よお……」

家来たち、近づいて。

小僧が一市を指差す。

内舎人頭の平太夫、<sup>(へいだゆう)</sup>登場。

平太夫 「この天台鳥薬なる薬。商いしたはそなたか」

一市 「え……いや、まあ……商いしたといえは……その」

平太夫 「間違いないか」

一市 「ええ。ただ……その……腹下しでよければ別の薬を。飲んで吐き出してしまえば、お

そらく気分も戻られるかと。お望みとあらば、あらたな読経も授けましょう」

平太夫 「何を申される。生き返ったのです。見事、姫が戻られたのですぞ」

一市 「姫」

平太夫 「左様。先達での使いの舎人は、中納言様、お屋敷の者。用心のため名乗りはせな  
んだ様子だが」

十郎 「中、中、中、中納言……」

平太夫 「この夏より原因不明の熱にうなされ、床につかれておいであつた。陰陽師や護  
摩焚きも一向に兆しを見せなんだが、この間、そなたのまじないが込められた天  
台鳥薬なる薬を飲んだ翌日、吐き出すものを皆、吐き出されたご様子で、姫の顔  
色赤みをおびて、粥を上がりたいと申された。今では床よりお起きあそばして庭  
で散歩をするまでに。屋敷中、それは涙をこぼして安堵し、中納言様直々にそな  
たを探して召しかかえると興奮至極であらせられる。氏素性も分からぬまま探し  
出すのは難儀であつたが、家来の申す場所にて待ち続けたかいがあつた。これも  
神仏のお引き合わせ。もはや、お越しめさらぬと申されますな。お勤めの寺に掛  
け合い必要とあらば、すぐに使いの者をやり、何としてでも許しを得まする」

一市 「いえいえ、お許しなど。ただ今、私、誰かれ不義理の起こる身では」

平太夫 「それではすぐにもお越しただけまするか」

一市 「よ……ございます。参りましょう」

平太夫 「いやいや、これはありがたい。心底、恩に着まする。恩に着まするぞ。さあ、そ  
うとなつては話が早い。私めは早速、主人に申し伝えに参りましょう。どんなに  
かお喜びになることか。本当におありがとうございます。よろしい。それでは  
明朝、改めて家の者を使いにお越ししますゆえ。どうかお待ちを」

一市 「ええ。ええ。よ……ございますとも」

平太夫 「ああ、これで安堵致しました。では、私これにて」

平太夫、深々とお辞儀。

家来たち、退場。

十郎 「兄貴、兄貴よ、えらいことになったじゃねえか」

一市、うづくまつたまま動かない。

十郎 「兄貴、どうした！」

一市 「(顔を上げ) 大きく当てやがったぜ……」

一市、天を睨みつけたかのような表情から大きな笑い声を上げる。

照明、CHANGE。

### ○見世物小屋

座長、登場。

座長 「世界を変える光の在り処に気付くその時、黄金の扉はほんの一瞬開かれます。人生の日の目はある日突然訪れるもの。その一瞬は真に短いほんの束の間。それを逃さずつかむや否や……人生のすべてが決まります。皆様方の胸の内にもおそらく覚えがあるはずでしょう。どんな生涯にも一度か二度、そんな運命の時が用意されております」

十郎 「アタシらにとつちや、まさにあの日がその時というもの」

座長 「暮らしは大きく変わって」

十郎 「そりゃあんた、変わったなんでもんじゃ。あれよあれよと出世をし、みるみるうちに周りの人間の首が垂れていく。圧巻でございましたな。中納言様というたった一人の人間の力添えで、目に映る世界の何もかもがすっかり様変わりする。世の中、上り詰めていくというのはこれ程までに劇的なものかと、驚く暇もないくらい勢いで一気に雲の上へと駆け上がっていった」

一市 「待て。いい加減な話を真に受けるな。私はこんな男を知らない。そんな話などまるで」

十郎 「アタシやね、何もここへ責めそしりに来たわけじゃない。むしろ、未だに惚れ惚れしてるんだ。兄貴のその生き様によ」

一市 「会ったことすらないのだよ、こんな奴」

十郎 「まさにこういうところで。このお方の凄いとところは。いついかなる逆境にあっても己の欲望だけで動く。迷いもなくね」

座長 「なるほど」

一市 「みんな嘘ばかりだ、みんな」

十郎 「ホラ御覧な、いつだって放つこの目の奥の鈍い光。きな臭い魔性の匂いも。すっかりよ、そいつに惹きつけられちまう。だからこそアタシや、どこまでもついて行こうと決めたんだ」

座長 「人生を懸けたわけですな」

十郎 「そうさ、どつぷりと。危なっかしい泥の中にこの身を沈めて……面白くない日なんてなかったね」

座長 「余程の魅力だ」

一市 「待てよ、待てたら」

座長、一市に鞭。

十郎

「人にはね、それぞれ自分が生きてく領域みたいなものがあるでしょう。領分というやつ。人間、どうやってもその世界でしか生きられないように出来ちまつてる。アタシらの場合、どこまでいっても闇から抜け出ることは出来ねえ」

座長

「満たされた生活を手に入れて、すっかり楽に」

十郎

「いやいや、それがこの方のこの方たる所以で」

座長

「安泰とはならなかった」

十郎

「手に入れた宝の箱を抱えた人間が次に考えること。それは、さらに大きな宝を手に入れるということ。それを掴めばまた次。さらに大きく、もっと余分に。人間の性根というものはね、つくづく変わるなどないんです」

座長

「際限なく生まれてくる欲望を次々に満たそうと」

十郎

「それに、この方の場合は情熱の度合いが違う。頭の回転も益々、磨きがかかり。世を渡る術を自ら編み出し。そのくせ周りにはよく見えますよ。ぬかりはないんだ。出会う人出会う人、ちゃんと匂いを嗅ぎ分けて必要とあれば馬鹿にも阿呆にもなれる。この方がよく知っているのはね、自分の欲だけじゃない。他人の、世の中の人すべてのそれを、ちゃんとわかまえてるんです。瞬時に見抜いてしまうんだ。今まで伊達に地の底で世の中を見てきたわけじゃない」

一市

「いい加減にしないか！お前たちのでたらめな芝居の道具にされてたまるか。私はね、長年に渡って行を積み、解き放たれた美徳の世界に到達した人間なのだ。欲などというものは一番遠い存在なのだ」

十郎

「兄貴、兄貴よう。アタシやね、あの頃の勢いに乗った兄貴の背中を見るのが好きだった。欲への執着を決して捨てず、限りなく高みへ昇ろうといつも知恵を巡らし、世の中で起こるどんなことも見逃すまいと鋭い目つきで見つめている。アンタ様のその生きざまに、アタシや根っから夢中になったものだ」

一市

「まだ言うかこの悪党。一体、誰に頼まれ、嘘を続ける。私はお前などまるで」

十郎

「いいですとも。アタシや、兄貴にそう言われることは承知の上でやって来たんだから。ひと目：ただもう一度、出会いたかったそれだけで。いつ会えるかいつ会えるかと待ち焦がれ、随分、探して回ってみたいもしたが、ようやく巡り合うことが出来た。嬉しいよ。アンタ様の何から何までアタシや惹かれていたんだからね」

一市

「私はお前など知らない。ありもしない話に時間ばかりを無駄に過ごしている。私  
はね、一刻も早くここから出て、男を探さなくてはならないのだよ」

十郎

「そうやってこの方は、いつも先へ先へとお急ぎになる。宝の箱をいくつ抱えても、すべて我が物に収めようと掴んだ糸を手繰り寄せ、周りの景色を次々に変えようと決して止まらない」

一市

「いい加減にしないか」

座長

「それは、宮中に入り込めた時ですら」

十郎

「むしろ、あの時ほどこの方の本領が発揮されたことはありません。勢いはなおも止まらず、様変わりする自分たちの暮らしそのものが、絵巻物に写されていくかのように何もかもが輝いて。上りつめて上りつめて、際限なく欲望の実を実らせ」

座長 「欲しいものすべてを手に入れよう」と

十郎 「知恵を巡らせ、思いのままに意のままに。またこれが次々と思惑が当たる。本當にこの方の引きの強さつてもものは、全く手のつけられぬ」

一市 「馬鹿なことを」

座長 「その様子はさながら」

十郎 「まさにこの世の春というもの」

照明、CHANGE。

○新しい寺の離れ

遠くで雅楽の音、聞こえる。

座興の宴を盛り上げる受領と小役人。

中央に座をとる公家、遊女をはべらせている。

せわしなく酌をしてまわる一市の姿。

遊女たち 「節をつけ手を叩き」 そら、御足はしたり。御足はしたり…」

公家 「おうおう、これこれ」

小役人 「ほらほら足元」

遊女たち 「御足はしたり。御足はしたり…」

小役人、尻もちをつき。

一同 「したり。したり」

受領 「しこたま酔いましたな」

一市 「何あにまだまだ。ササもまだこんなに」

一同、賑やかに笑い。

平太夫、登場。

平太夫 「上人殿、先達てのお頼みの薬師如来像、別光院より格別の計らいで寄進賜りましたぞ。早速、本堂へ運ばせました」

受領 「おお、それはすごい」

小役人 「あの御像を手中に」

平太夫 「合わせて日光菩薩、月光菩薩もそれぞれ。これらもお上のお口ききあって」

公家 「おお。さすがは中納言様」

平太夫 「掛け軸、表具、その他の像は新たに仏師を招いてお頼みしてある。伽羅のお数珠に錦の袈裟も数日内には皆、届く手はずに」

一市 「ありがたきことにございまする」

小役人 「調度品から備品に至るまで、この寺はすべてが都で評判の物ばかり」

公家 「すっかり名寺の仲間入り」

受領 「中納言様の力の入れようが分かる。余程、姫君生還のご慈悲に感銘をうけいらっしゃるのでございましょうな」

公家 「左様。左様」

一市 「名寺などともつたいないお言葉。私など皆さまのお引き立てあってこそその過分な身の上。まだまだ未熟者でございます。お暇の折にはいつでも参られ、歌に作法

におつき合い、何卒お願い申し上げます」

公家 「いや、よう言われた」

受領 「腰も低く、気も回る」

小役人 「それでこそ宮中随一の人徳者といわれる中納言様のお抱えでございますな」

公家 「我らも万全、後押し致しますぞ。何せ勢いのある、これからのお人ですからな」

一市 「いやはやそう仰っていただけるとは心強い。さあさ、まだまだ料理も運ばせませませませ」

平太夫 「他に必要なものあらば、何なりと申されよ。お上、並びに姫君より念を押して、

くれぐれも意にそぐわぬことなきよう、仰せつかっておりますのでな」

一市 「まことにもったいないお言葉」

公家 「ささ、こちらへ。どうか、ご一緒に一献」

平太夫 「いやいや、これより屋敷に戻って夜の宴の準備を。お上、久方ぶりの大賑わい。

晴れて盛大なる快気祝いの席でございますからな」

一市 「それにつきましては、はるばるお越しのこの方々、姫様のお祝いに明宝の品の数々」

平太夫 「ほう、それはそれは。恐悦至極に存知たてまつる」

一市 「この上は、今宵の宴にまかり越し、一言ご祝辞を賜りたい所存とのこと」

平太夫 「宴に」

公家 「ええ、ええ。我らとて姫様のお元氣なお噂を心よりお慶び申し上げます」

一市 「何卒、お上の御前に」

平太夫 「よろしい。この寺に懇意な御方々であれば、お目通りも叶うでしょう。それではこのまま宴に加わり、まずは姫のご機嫌をうかがい」

受領 「おお、それは話が早い」

一市 「よろしゅうございました」

平太夫 「それではこれにて。明日またお世話つかまつる」

平太夫、退場。

公家 「(一市の手を取り)かたじけなや。かたじけなや」

受領 「これで中納言様との顔が繋がりましたぞ」

公家 「遥任の国司や受領というものは、いくら財があっても殿上に縁遠いのが常。それ故、このような機会をどれだけの年月、待ち望んだことか」

小役人 「だから、申しましたでしょう。こちらにお出でになれば、必ずどうにかしてください」

公家 「まさに噂通りの御仁。この借りは必ず何かの形で」

受領 「どうぞ、これからは末永いご縁。何なりと申されませ」

一市 「痛み入ります」

公家 「それでは。今日のところは、ひとまず」

一市、深々と礼をし見送る。

公家たち、退場。

一市、だらしなく膝を崩し、酒を注いで飲み干す。

長き笑い声上げる。

一市 「げに恐ろしきは身分の違い、見える景色の違いというもの。ついこの間まで、粥

の一杯も食べぬ日があったというのに」

十郎、登場。

着慣れぬ下法師の姿。

十郎

「兄貴」

一市

「(短い間) こっちへ」

十郎

「へ」

一市

「(いきなり扇子ではなく) 何て呼ぶのか教えたばかりだろ」

十郎

「いけねえ。そうでした…上人様」

一市

「いい加減、慣れろというのに。何だい、その下法師姿も未だに板につかない」

十郎

「どうも上流の暮らしにはついていけねえ。くすぐったくって」

一市

「お前という男もつくづく貧乏性だね。まったく世話の焼ける」

十郎

「まあ、そのうち慣れます」

一市

「で」

十郎

「はい。実は、お訪ねの方が」

一市

「客か。しようがないな次から次へ」

十郎

「それがその、お初の方々で」

一市

「何だい、また誰かの紹介か。素性をはっきりしてるんだろうね」

十郎

「二条から参られたという坊さんなんだが。それ以上は、いくら聞いてもはっきりしないんで」

一市

「何、はっきりしない。ダメだダメだ、そんなもの」

十郎

「いや、始めはアタシも門前払いをと、そう思ったんだが。しかしね、上人様とは

一市

同じ門下だとくり返すもんで。そんな嘘をつく奴もいないかと一応、お耳に」

十郎

「同じ門下…」

一市

「御挨拶かたがた、相談申し上げたいことがあるらしく」

十郎

間。

一市

「よし。いいだろ。通せ」

十郎

「へ」

十郎、退場。

ややあって、黙念と珍念、登場。

黙念

「おお。これはこれは」

珍念

「やはり、一市殿であったか」

黙念

「何人ものお人を通して、ようやくこちらへ」

珍念

「いやはやお懐かしい」

黙念

「実に数年ぶり。よくぞ御無事で」

珍念

「真に立派になられて」

黙念

「まさかとは思いましたが、名を聞き、人相を聞き、お噂を重ね合わせて考えます

珍念

るにあなた様に違いないと。こ奴と二人話し合い、思い切って出向いた次第で」

黙念

「足を運んだ甲斐があったというもの」

珍念

「あなた様のごは都に出てからもよく思い出しておりますぞ」

黙念

「いかにも。いかにも」

一市 「兄様方も随分、立派におなりで。すっかり都に馴染んでおられるご様子」  
黙念 「いやいや、私どもなどは宮中の五位の世話やら客人の供の相手をするだけの身」  
珍念 「とても都のよき風に当たっておるとは申せませうまい」  
黙念 「しかし、遊行の旅からよくぞ都へたどり着かれた」  
珍念 「どういう経緯があつてまた」  
一市 「ま、ま：それが聞くも涙、語るも涙のお話でして」  
黙念 「うんうん。色々のご苦労があつたに相違ない。お察し申し上げる」  
珍念 「しかしながら、洛中では人身あらざるお方ともつばらの評判」  
黙念 「おそらく長年の旅で得た功德が、力となつて宿つておられるのでしよう」  
珍念 「兎にも角にも、中納言様を味方につけられたとあれば、これはもう宮中の出入りを許されたも同じことでございますからな」

黙念 「何しろ私ども世話役と違い、ご出世は意のまま。正式なる内供奉候補すら夢のお話では」

珍念 「いかにも。いかにも。私どもの間では、もうすっかり噂に」

黙念 「それを聞きつけた我らはもう、同郷の好でいてもたつてもおられず」

一市 「何、内供奉。それは真でございますか…！」

黙念 「真も真。今やあなた様は時の人。大事な段に足を掛けておられますぞ」

珍念 「そこで、我らが是非ともお力にならせて頂きたい」

黙念 「わざわざ足を運んで出向いたわけで」

一市 「あなた方に何か知恵がありますか」

黙念 「それはもう。都には長ごうございますからな」

珍念 「蛇の道は蛇というもの。それなりに。ま、それなりに…」

一市 「それは心強い。是非とも詳しいお話を」

黙念 「ま、ま、そう慌てず」

珍念 「急いでは何を仕損じます」

黙念 「策はじっくり練りませんと」

珍念 「これから長いお付き合いが出来れば、おいおい手を案じ」

黙念 「あなた様とは我々、一つとなつてかかりませんと」

珍念 「いかに。いかに」

一市 「よろしい。都に詳しいお二方が側にいて下されば、私とて心強い限り。ま、今日はゆるりと。何もありませんが、すぐに支度を。(手を叩き) 席を持って」

十郎の声 「へーい」

黙念 「(お辞儀) いやはや、どうも」

珍念 「(お辞儀) 痛み入ります」

黙念 「いやあ、それにしても本当にご出世になられた」

珍念 「よもや、あなた様とこのような形でお会いできるとは」

一市 「私とて寺を出る時には、想像だにしておりませなんだ」

黙念 「時に、あの噂を」

一市 「何です」

珍念 「聞いてはおられませんか」

一市 「はて、どのような」

黙念 「ええ。その何ですか、見たという者が」

一市 「見た」

珍念 「ええ。あの方を」

黙念 「源宋様」

一市 「…」

珍念 「おられるらしいのです。この都のどこかに」

黙念 「町人の格好で治水工事の指揮をとっているとか」

珍念 「洛中で童相手に手習いの真似ごとをしているとか」

黙念 「噂は様々。ただ、一人、二人の話ではなく」

珍念 「御存知なかった」

一市 「まさか。初耳ですな」

黙念 「そうであつたか」

珍念 「あなた様とは都にも共に現れ、一緒に暮らしていると話す者もおりましたので」

一市 「滅相もない。あの方とは結局、会えず終いで」

黙念 「ま、そうでしょうな。よくよく考えてみても、このような御身分のあなた様が、都で御一緒だったはずも」

珍念 「しかしながらこれ、いささか厄介な話ですぞ」

一市 「厄介と申されますと」

黙念 「すでに過去の人ではありませんものの、都でその名を知る者はまだまだ多い」

珍念 「雅の方々というものは名に弱いもの。何はなくとも、まず名を欲しがる」

黙念 「あれだけのお方だ。いつ力のあるお方に拾われ、お抱え坊主になるやも」

珍念 「これ、まったくの夢物語とは申せませう」

黙念 「と、なれば実に煩い存在。名だけなら十分に内供奉の座をもおびやかし兼ねぬ」

珍念 「出世のお席には限りがございますからな」

一市 「…」

黙念 「まあ、そう難しいお顔を召されますな。これから近しいお付き合いをしていくことになったからには、私ども、何としてでもあなた様に高みの位へ座してもらわねばこの気がすみません。それだけの器、それだけの後ろ盾、すべてお揃いなのですからな。それこそが私どもの願い。お心づくしにございますから」

珍念 「ご案内召さるな。一声かければお力になると申す者も集まって参ります。これまで我がらが培った都での繋がりや、すべてあなた様に注ぎましようぞ」

一市 「心強い限りでございます」

黙念 「しかしまあ、行方知れずの高僧が、まさかそのような姿でなりを潜めておいでになるとは。あのお方も何を考えておられますことやら」

珍念 「いかにも。いかにも」

一市 「…」

十郎、登場。

十郎 「お待たせを。向こうへ新たに膳を設けました」



一市 「ささ、あちらへ」

黙念 「それはかたじけない」

珍念 「いやはや、まったく以って過分なお計らい。遠慮なく頂くと致しましょう」

黙念 「そうですね。これからの算段でも腹藏なくお話ししながら」

黙念と珍念、退場。

一市、腰を上げようとしなない。

十郎 「上人様：どうかなさいましたか」

一市、重く険しい表情を浮かべ。

照明、CHANGE。

### ○見世物小屋

座長、登場。

座長 「平安をかき乱す不穏な空気は、いつだって向こうから使いをよこす。心の闇に至る所で息を吹き返し、悪徳の炎、再び青々とゆらめく……。やっとなんだ至極の暮らし、その座をおびやかす種が、もう蒔かれ始めたわけですな」

十郎 「もつとも、アタシらなんてそんな風に考えてるなんざ思いもなかったがね。だってそうだろ。何もかもがうまく転がっていく毎日。日ごと評判は上がる、嫌というほど実入りは増える、取り巻きは次から次へとやってくる。それほどの暮らしをしている最中に、そんな暗い影が落ちてるなんてさ」

一市 「やめろ。もうやめろ。話がどんどんおかしな方へ」

座長、一市に鞭。

座長 「その二人の兄弟子は足しげく寺を訪れて来たのですね」

十郎 「それがもう、あれやこれや吹きこむのさ。さも、ご出世は意のまま、思いのままという風に。まさかこちらだって、丸のまま鶉呑みで信じているわけじゃなかったが、そこはそれ、腹の中では探り合いの損得勘定。差し引きこちらに分があれば、ご和算で利用する」

座長 「ええ。それはそうでしょう」

一市 「やめろというのに！」

座長、一市に鞭、激しく。

座長 「えらくムキになるじゃないか」

十郎 「実際、世渡りにかけちゃあの二人、流石はあれでも都人の端くれ。それなりのことをちゃんと身につけていやがる。式典の作法に、出世の根回し、つけとどけの算段。袖の下の額から、贈る相手の評判や趣味趣向、屋敷の中の様子に至るまで、それは事細かにね。まあ、これだけでも、こちらは毎度毎度、過分な馳走をしてやるだけの甲斐はあるというもの。そりゃあ内供奉まで上り詰めたら、それはもうご安泰は間違いない。あとは左うちわで思いのままに人生が動いてくれるや」

座長 「それもまんざら夢ではない位置にいたわけで」

十郎 「そりゃもう、出世も出世。後押しも勢いもあったしね。ところが、気がつくとその顔から一人、笑みが消え、部屋にこもることが多くなってた。暗い目をして何

やら物思いにふける毎日。時折、沙弥や中童子などを使つては、内々に調べさせてる様子。しかし、その狙いが何なのかは誰にも知らされちゃいない。こりやおかしいぞと思ひ始めた頃には、もうすっかり調べがついた後だった。ある夜、いきなりその腹の内を打ち明けられた時にや、それはもう驚いたのなんの」

座長 「新たにやらぬ計画を」  
十郎 「そういうこと。人間という奴は耳ざわりのいい世辞を百並べられるよりも、悪い材料一つで神経が逆立つというもの。その身が高みに上がれば上がるほどその度合いも強くなる。こと源宋の旦那に関しちや、兄弟子二人が来るたびに、毎度どこかしこから噂を仕入れてきては元凶のように心細いせりふを並べたてていたからね。しかも、どういう経緯で今に至るか、どこからたどり着いて来たかということまで探ろうとしていやがる」

座長 「それはまづい」

一市 「いい加減にしろ」

十郎 「宮中じゃ黒い噂はご法度だからね。よからぬ過去でもバレちまえば元も子もなくなる」

座長 「ここまで積み上げてきたものが水の泡」

十郎 「先手を打つ必要があった。あれは、そろそろ野分きの季節にかかった頃。そりや恐ろしい目つきで、アタシ一人を奥の座敷にお呼びになった」

一市 「待たないか」

座長、一市に鞭。

座長 「どうしようというんです」

十郎 「暗い闇夜のはかりごとさ。ようく分かっていたんだ。ここが正念場ということ。

迷いはないって様子だった」

座長 「出来上がった計画は」

十郎 「それはもう、ぬかりのない」

座長 「ほう、つまり」

十郎 「邪魔な口は、閉じてもらうってことに」

十郎、一市に手拭いを投げる。

甲高い笛の音、IN。

照明、CHANGE。

## ○地藏堂

舞台奥に地藏堂の扉が見える。

投げられた手拭いで頬被りをした一市と十郎。

十郎 「兄貴よ、日が暮れるとここいらは一層うらぶれた匂いがするな」

一市 「それがどうした」

十郎 「物騒だぜ。ホントに現れるかな。こんな所に呼び出して」

一市 「昨夜あれだけ話して聞かせたろ。手筈は整えた。肝据えやがれ」

十郎 「ここんところ、寺の客ばかりがお相手で鳴りを潜めていなすつたが、驚いたね…

すっかり目つきが昔に戻って」

一市 「この一晩でこの先の行く末が決まる。今さらこの暮らしをこの手からこぼれ落とすことなんて出来やしないんだよ。手違いは許さねえ。ぬかるな」

甲高い笛の音（風）、強く。

十郎 「それにしても、すごい風だね。昨夜の嵐で川の水かさがこんなに増して」

一市 「それも勘定のうち。これなら人っ子一人通りやしない」

十郎 「しかしよ…ホンとにいいのかい。一時は苦楽を共にした仲。兄貴にとっちゃ謂わば自分の身内だぜ」

一市 「お前が悪党の頭一つ抜け出さなかったのはそれよ。すでに袂を分かつ仲。言いも悪いもそんなもんとつくに捨てた」

十郎 「兄貴がそこまで腹据えてんならそれで。アタシや、どこまでもとことんついて行く決めてんだから」

一市 「いつだって私は、先の先まで考えて獲物をものにしてきた。私の言う通りにさえしていれば間違いはないんだよ。何でも思い通りにしてみせてやる。今の私は冴えに冴えてるんだからね。まだまだ駆け上がっていくんだ私は」

十郎 「全くもって兄貴の欲はどこまでも深く出来たら」

一市 「欲ってものは深いからこそ欲よ。取るに足らない願い事を数集めたって何になる。やっとなんだ出世の門、誰だろうと邪魔はさせない」

十郎 「見なよ、天運も味方に。月も陰った」

一市 「（胸ぐらを掴み）何だ！天運だと、この野郎」

十郎 「苦しいよ、兄貴。苦しいってば」

一市 「天運なんて言い草、私の前で二度と使うんじゃないよ。あの世からはな、助けなんて誰も来やしないのさ。天運なんてありもしないまやかしに人生賭けてられるか、クソツタレ！」

十郎 「分かった…分かったよ。おっかねえなあ。何もそんなに目くじり立てなくても」

一市 「今度、言ったら承知しないよ」

十郎 「やっぱり今日の兄貴は、いつもと違うや」

一市 「（徐に奥を見て）誰だ！」

十郎 「地藏堂か」

一市 「ああ。確かに今、物音が」

十郎、言うやいなや素早く奥へと走る。

一市 「（天を睨み）よう！今夜ばかりは邪魔するんじゃないやねえぞ。後にも先にも、こいつはたった一度、生涯かけてのはかりごと。念じた願いの行く末は、己のこの手で成し遂げてやる。いいか、くれぐれも言っておく。今夜ばかりは悪行の匂い、嗅がず障らず目えつむって寝てな」

十郎、戻ってくる。

十郎 「ここいらの河原者が一人。なあに逃げたよ。こっちの姿見るなり」

一市 「聞かれやしなかったらうな」

十郎 「大丈夫だ。ねぐらを盗られて泡食ってるだけ」

一市 「よく確かめておかねえか、馬鹿野郎」

十郎 「ここいらの河原者だけはどうにもならないね。うようよいてまるでブヨか蚊よ。それでも、案ずることはない。どいつもこいつも自分以外のことには何にも気にかけてねえ奴らばかりさ。他人様のことなんざ目にも入らねえ」

一市 「それにしたってお前、あのお堂は今から…」

十郎 「大丈夫。いざとなりやこの辺りの連中に小銭でも渡して探させりゃいい。僅かな銭で何でも言うこときく輩ばかりさ。その後煮るなり焼くなり…そうそう、どうせ捕まえるなら、計画通りにあの二人とここで一緒に燃しちまやあ、いつそ薪代わりになっつていいかもしれない」

一市 「お前って野郎は」

十郎 「ね、悪党の年季ならアタシの方が年かさなんだから」

一市 「悪い奴だねえ」

一市と十郎、低く笑い合う。

十郎 「(徐に身構えて) 来た。今度こそ人影だぜ」

一市と十郎、素早く身を潜める。

惠蓮、登場。

一市、惠蓮の前に出て行く。

惠蓮 「！」

一市 「久しぶりだな、姐さん。残念だが、小僧の使いが渡した手紙はお師匠様からのものじゃない」

惠蓮 「…」

一市 「夜通しの橋の修繕なんて今日はどこへ行ってもないよ。だから手弁当はいらない。(惠蓮の手から包みを奪う) アワの饅頭か。いやんなっちゃう。いつまでもこんなものを食って」

一市、包みを乱暴に放り。

惠蓮、逃げようとして。

一市、腕を掴んで抱き寄せる。

一市 「おっと！悪い予感がしたか。話をみんな聞く前に行こうとするなんてさ」

惠蓮 「(もがいている)…」

一市 「あの時、私の手の中に入っていればこんなことには。しかし、仕方がない…それを選ぶのだのお前さん自身だからな。心配するなよ。旦那もじきにここを通る」

惠蓮 「(更にもがく)…」

一市 「そうよ、いい勘してるね。今日があんたらの最期になるのさ」

惠蓮、手を噛みつき逃げようとする。

一市 「痛え！」

十郎、すでに先回りしており、惠蓮を捕まえる。

一市 「同じ手に二度かかるほど私や間抜けじゃないよ」

十郎 「姐さん、悪いね」

甲高い笛の音。

十郎、背後から帯で首を絞める。

一市 「安心しな。旦那もじきに後を追っかける」

惠蓮、苦しみもがいている。

十郎 「おら、じつとしな！じきに終わるから」  
一市 「連れてけ」

惠蓮、ぐったりとして。

十郎、乱暴に地藏堂へ引きずり込む。  
地藏堂の扉、閉まる。

一市 「すまんが姐さん、これだけ聞かせてくれよ。後生だから最後にこれだけを。気が遠のいてきただろう。あんたはもうじきに死ぬ。だから、なあ、教えてくれよ。今、あんたの目の前に何が見えるのか。真っ暗かい。それともひよつとして、後光を指した誰かが迎えに」

扉の奥から、逃げ出そうとする惠蓮の手足。

十郎 「ええい、じつとしろというのに」

惠蓮、再び引きずり込まれる。

一市、表から扉を足蹴にして閉める。

笛の音、静まる。

一市 「ああ、逝っちまったか」

一市、人の気配に気づく。

やや間。

源宋、登場。

川の様子を見ているが、やがて暗がりにも人の気配を気づく。

源宋 「もし。もし。そこに誰か…(近づき)この辺りはまだ水かさ。寢床は別にとりなさい。今夜も用心にこしたことは…」

「生憎、寢泊まりする所なら困っちゃいないです」

源宋、一市に気づく。

源宋 「一市」

「お久しぶりです。お師匠様」

源宋 「お前が何故、こんな所に」

「いけません。心中の相手が遅れてきちゃ」

ふいに地藏堂の扉が開く。

十郎 「いけねえ。この扉、壊れて立て付けが悪いや」

源宋、惠蓮の屍に気づいて駆け寄る。

源宋 「お前！どうしてこんな！お前！お前」

十郎 「(逃げ)おっとと…お久しぶりです。ここいらは物騒でござんすからね。旦那、そ物盗りや追いはぎにお気をつけあそばさねえと」

源宋 「これは一体」

一市 「だ、か、ら、心中だって言ってるじゃありませんか」

源宋 「お前たち」

一市 「お逝きになったのはつい今しがただから、急いで行けばまだ間に合うでしょう」

十郎 「お気の毒様」

源宋 「何のために」

十郎 「むろん、我々の暮らしのため」

源宋 「お前たちの」

一市 「私はね、まだまだ出世をしなければいけないのだよ」

やや間。

源宋 「そうか：私が邪魔か」

一市 「こんなところでつまずいてはいられない」

源宋 「(惠蓮の亡骸を抱き寄せ)馬鹿な…。そんなことで：たったそれだけのことで：こんなひどい」

一市 「だって、何でも知ってしまったているでしょう。間がね、悪いんだな。あなた方という人たちは」

源宋 「お前にとっては我々など物の数ではないというのだね」

一市 「残念ながら人間というものは、生きる値打ちにオモ、カルがあるのですよ。生きている限りは是非ともそのオモたい方に入らなくちゃいけません。いつだってそちらが優先ですから。私は都でこれだけは学びました。人間信じるものなど自分以外に何も無い」

源宋 「私はお前の考えに、もはや興味はないよ。何をし、行うのか。まるで心に響いてくるものはない」

一市 「私という人間は、生まれながらに世俗から離れて育ち、あの巧みに彩られた美しい仏の世界だけを目に映して生きてきました。まばゆいばかりの經典の山に埋もれ、神々しい教えにその身は震え、時には涙するほど。陶醉し、心酔しきって。私は現実の世界をあまりに知らずに育ち過ぎた」

「…」

一市 「あの夏、通り過ぎた無慈悲な日々。ひとすくいの水のため、人が人であることを捨て、鬼となり己の欲を生き抜いてみせる。それもまた人たらしめんことを私は嫌という程、見、知った。いいですか。あれこそが本当の生身の現実なんです。美しく彩られた世界は程遠く、生々しい業にまみれて殺生を繰り返す。もつともらしい經典からの教えはまるで無力で虚構な絵空事。何も助けず、誰も救えない。あなただって毎日目にしているでしょう。洛中の外れで、哀れにもがき苦しみ生きる人間の姿を。まるで虫けらのごとく小さく非力な姿。それでも彼らは闇雲に、己が生きることへ執着をみせる」

源宋 「お前には見えないのだろうね。その小さなもがき苦しむ人々の中にも僅かな光は日々、訪れる。憂いだ生活の中にも喜びがあり笑いや情けもある。たとえ僅かでも」

一市 「見えません。貧しさは何事も生みはしない。優しさは愚欲に潰され彼方に消える。あなたが見ているものはね、現実には存在することのないただの幻ですよ」

源宋 「そうだろう。そこにお前の価値をおけないならば」

一市 「ああ、あなたはそうやっていつまでも達観した物言い世界を見つめている！そうなんだ。あなたは教えを捨てたと言いながら、いつまでも見せかけの慈悲を振り舞い続ける。あるはずのない世界の理想をうたい続けている」

源宋 「またそれか。本当にくだらない。私は教えを捨てた。それは間違いないよ」

一市 「いいえ。そんなはずはない。あなたは教えを捨てずに生きている。消え去らぬ未練と恐れの中に身を置き続けている。いつまでも弱き者にその身を埋め、力なき者へ寄り添う。口さえ利けぬそんな女に生涯をなげうつような真似をする」

源宋 「私にとってこの人は世界のすべてだ。あの日、あの岩屋で施しの粥を受けた時、私はこの人から新たな命を授かった。私は生かされ、そして受け入れたのだ。執着を。この世に生きる執着というものを。私の新たな生き方がお前の目にどのよう映るうが、私は私の新たな世界を生きている」

一市 「嘘だ。何故嘘をつく。尤もらしい言葉をいくら並べてみても私にはお見通しなのだ。私は騙されやしない。あなたは背を向けた教えの道に負い目を感じたまま生きていく。未だに彷徨い生きている。後ろめたさに生きている。あの夏のあの村での出来事を呪縛のように脳裏に焼き付けながら、慈悲に満ちた世界に限りがあることを我が身で知り、この世の無限に存在する苦を受け止めきれぬことを知りながら、それでもまだ、あの御方が目の前に訪れる日を燦る火のように心のどこかで怯えている。いや、待っている。心の奥底で魅かされている」

間。

源宋 「捨てきれぬのだね。あの御方を」

一市 「何を馬鹿な！」

源宋 「それならそれでよいではないか。新たな人生はもう始まっている。お前はもはや私の弟子ではない。私に従う義理はない。お前はお前の真理で生きれば」

一市 「言われずとも私はあなたからとうに決別している」

源宋 「いいや。お前はかつての私の面影を未だ追い求めている。過ぎた私を通してあの御方を追い求めている。私は教えを捨てた。私は私の新たな世界を生きている。そこには崇高な教えも大それた理想も何もない。日々はただ流れ行くだけ。この世に起こる一切に意味を求めず、私はただ生きているだけ。ただそれだけ。それで十分。人それぞれ様々な境遇で色とりどりの生き方があり、その数ごとの真理がある。この世に起こる様々な出来事は偶然の重なり合い。それで十分。必然を否定した時から私の中で仏の世界は消えている。世界を一つに導く考えもない」

一市、怒りに体を震わせ、やがて静かに笑いだす。

一市 「ようよう説教してくれた。これから洛中で怖いものなしとなるこの私に……」

ゆつくりと太鼓の音、IN。

見世物小屋の座員たちが一人また一人と、一市の周りを近づき始める。

一市 「おい、そろそろいくぜ」

十郎 「よしきた。何だか小難しく退屈したなあ」

十郎、縄を持って源宋の背後に回る。

源宋 「(あらためて恵蓮を大事に抱え) ああ…移ろいいく。命の息吹が移ろいで」「そうとも。あなたに見える現実と私の見える現実はまだで違う見え方をしている。宮中では黒い過去はご法度ですから。私はね、まるで別の人間に生まれ変わるのです」

十郎 「旦那、じきに終わりやすから」

十郎、源宋の首を絞めだす。

源宋 「ああ：流れていく。世界が流れていく」

一市、駆け寄り十郎に手を貸す。

一市 「どうだい、本当のところは！え！誰かが迎えに来ないか」

源宋 「流れていく……」

一市 「あの世は本当にあつたのかい、なかったのかい！ああ」

笛の音（風）。

地藏堂の扉、ふいに閉まる。

太鼓、激しく。

集まってくる座員たち。

一市、飛び出してくる。

正面を見据えながら大きく肩で息をしている。

一市 「やい！地藏堂に火イつけろ」

照明、CHANGE。

### ○見世物小屋

太鼓と歓声で一気に盛り上がる座員たち。

座長 「さあ！これが真正銘この男の本当の姿だよ！（鞭）仏の顔をのぞかせて、実しやかに美德や悟りを説いておりましたが。そのからくりは皆様ご覧のこの通り。

これほどまでの非道の果ての、すべてが今、明るみに」

一市 「いい加減にしないか！私は知らないのだよ！そんな話も、こんな男も」

座長 「（鞭）真実の泉は嘘でその水を血の色に変えるといひます。薄暗く漂う紅のぬかるみに、深く沈んだ悪徳の香り。その業で血の池に足を取られて思いはあふれる。しらを切るにはそれなりの毒を浴びなくては、地獄の鬼はまぬがれやしない。もう一度お聞きしますよ。この男の生涯、毒にまみれて」

十郎 「（奥から出てきて）猛毒です」

一市 「何を言う！」

太鼓と歓声。

座長 「色を変えた真実の泉は、永遠に広がりその姿を留める。醜く汚れて元色はやがて朽ち。欲得に目がくらむ黄金の甘美。人が人たらしめる。さあ、ようやく御覧なさい。見せかけの聖人の面をつけた畜生の姿を」

一市 「お前たちはどうとうしたて上げたのだね。私を地獄の悪人に！」

座長、一市に鞭。

十郎 「火をつけたお堂は風にあおられ、瞬く間に辺り一面に燃え広がった。それはもう都中が大騒ぎになるほどに。数え切れぬくらいに巻き添えが出ちまった。流石にこいつは予想外のこと泡喰ってたんだが、この方の悪運は尽きることを知らない。ようやく収まった火元の焼け跡から、源宋の旦那らの亡骸が見つかり、下手に仕立て上げられた。都の連中は寄ってたかつて生臭坊主だの心中者の火付け人だのと、すっかり大悪人とのしる始末。それに引き替え、この方ときたら、火事で亡くなった連中の墓碑を建てさせ、自分の寺で大追悼を催して弔った。そ



れがまた、これ見よがしに涙なんか流してみせてね。こいつが世間では大評判。手前のしでかした悪行で手を合わせて関心されるんだから世話ねえや」

太鼓。

十郎 「兎に角、都で知らぬ者が無いほどにこの方の名は轟いて、とうとう天子様のお耳にまで届いちまった。牛車に乗った褒美の品々が大通りを渡ってやってきた日には、中納言様も大層お驚きになって、諸手を挙げてお喜びになられるわ、御礼の拝謁におもむきになるやらで、益々この方に重きをお置きになられ。檀家は増える、弟子は集まる、寺は大きくなるで、身分は益々上がり、説法、説教の毎日。学を説き、多くの弟子を育て、尊い教えを広め出した。接待のお客も位の高いお方ばかりになってね。本当にお内具様の声がかかるところまでやってきた。しかしね、そこまでだったよ」

座長 「そこまで」

十郎 「随ちてったんだよねえ。ここからものすごい勢いで」

太鼓。

座長 「きっかけは些細なこと。そう。都でね、あのわらべ歌が流行り出し」

座長 「わらべ歌」

子供のわらべ歌の声、聞こえ出す。

歌声 「♪みやれ みやれ

ほとけの 面した おーには

お堂の ころし

火をうち にげる

もとは 日照りの 泣き仙人

むらびと みすてた ぼうず」

十郎 「本当に分らないものだね。あれだけの勢いと、あれほどの力があっても、こんな流行り歌一つでつまづくとは。人の噂なんでものは誰にも止められやしないさ。知らぬは本人ばかりなりってね。凄かったぜ。あれほど鮮やかに転落していく様」

わらべ歌、繰り返す度に大きくなって。

耳をふさいでいた一市、たまらず立ち上がる。

周囲のわらべ歌、残ったままで。

一市 「誰か！誰かあらん！誰か！」

十郎 『その日、お呼びの掛かったの宴の催しから血相変えて帰ってくると』兄貴よ、えらいこった！」

一市 「どうなっておるのだ、あの歌は！お屋敷でご挨拶申し上げる方皆が皆、含みのある笑み。おかしいとは感じていたが、座興の宴とあいなり猿楽の道化どもの集まる間へ通されると、あのわらべ歌の大合唱。よくよく聞いてみるとこの歌…。何が何やら分からぬうちによりやく気付いたわい、一斉が視線の訳を。お屋敷のお殿様からは私の顔色を窺うような怪しい目つき…。身体の不振を理由に嘲笑の漏れる中を中座して来た。ええい！これは一体」

十郎 『えらい劍幕で、この方も泡喰った様子』それがよ、知らせを聞いて慌てて調べに回ったが。都中、すっかり広まって」

一市 「こんなになるまで気づかなかったのかい」

十郎 「すまねえ。最近じゃここに訪れる檀家の世話で表に出る機会も少なくなっていたもんだから」

一市 「言い訳なんぞ聞きたかないね。ここのところ急に客が増えたのは、物見遊山に私を覗きに來てたからじゃないか。とんだ赤っ恥だよ。これはもうわざと噂を流している奴がいるとしか」

十郎 「そいつは間違いないようだ。しかも、あの一件が兄貴の仕業だということまで」

一市 「誰だ！私の出世を妬む輩か。それとも恨みを持つ奴か」

十郎 『と、まあ、すっかり取り乱した様子で。すぐに町から仕入れた話を聞かせてみた』

座長 『どうなりました』

十郎 「それが、どうやら絵師が一人」

一市 「絵師だ」

十郎 「絵師といつても何処からともなく現れた、流れの河原者で」

一市 「河原者……。(間) まさか、あの時の地藏堂！」

十郎 「そうなんだ。あの晩どこかで、あのまま覗いてやがったらしい」

一市 「畜生。しくじったか」

十郎 「近頃、評判の地獄絵を描く男で、今じゃ物好きな宮中の連中までもが競って手に入れたがるそう。そいつがよ、どの絵もあまりに真に迫っているもんだから、これには手本があるに違いないと実しやかに評判となつて。そこへさるお殿様のお屋敷でその絵師本人が招かれた」

一市 「(苛々と動き) そうか、今日のあのお屋敷だな。道理で段取りがよ過ぎると」

十郎 「余興の座で殿様直々に事の真相を尋ねると、その絵師、冷々と噂を認め、あの夜の様子をすっかり話して聞かせたらしい。始めは嘘か真かと面白半分に聞き入っていた家臣たちも、ことの詳細さに身震いを覚え、たまらず周りに漏らしたそう。わらべ歌もこの男自らが町から町の童に伝えて歩き、今じゃ皆、面白がつて歌ってやがる」

一市 「何だ、何なのだその男は。明らかに私を陥れようと。しかし…それにしても、どうして私が都に出る前の素性まで」

十郎 「それが全く分からねえ。兎に角、今じゃあることないこと尾ひれがついて広まつてら。あの野郎！ヨシ秀め」

一市 「ヨシ秀！」

十郎 「ああ。そう言ったな、その地獄絵師」

一市 「(おろおろし出し) ヨシ秀…ヨシ秀」

十郎 「どうした、兄貴よ。顔が青いぜ」

間。

一市 「裏に牛車を用意させる…刀を持たせた舎人を揃えて。ここを発つ！そいつに乗って、都を出るまで誰にも中を開けさせるな。無理に來る奴は構わず斬れ」

十郎 「ずらかるって…正気かよ」

一市 「迷ってる暇はないよ。崩れる山は止まっちゃくれない。急ぐんだ、さあ」

十郎 「金は」

一市 「荷車にありつたけ積んで夜に宿場に届けさせる。船を使って川を下ればいい。た  
んまり褒美を掴みさえすりゃ、何でもする奴などゴロゴロしているだろ。都を落  
ちても名を変え、衣を変えりゃ、地方で贅沢に暮らすくらいどうにだって」

十郎 「驚いたね。この方の頭のめぐりの冴えること。こんな時でさえ、あつという間に  
算段を始め、次の瞬間にはもう踏ん切りをつけてる。まるで憑き物がついたかの  
ようだ。しかしね、この時ばかりはこちらの思いとは裏腹にそう上手く事は運ば  
なかった」

呼び笛の音、響き渡る。

座員たちが騒々しく足音を立てる。

一市 「何だ」

十郎 「検非違使の役人連中だ！刀を抜いてこっちへやって来る」

一市 「こんなに早く」

十郎 「どうする兄貴よ」

一市 「裏口にまわれ！」

十郎 「(行こうとするがすぐに戻って)ダメだ！ものすごい数で周りを囲まれて」

平太夫と棒切れを持った座員たちが雪崩れ込む。

平太夫 「直れ！直れ！二人ともそこに直れ！」

十郎 「やかましいや！」

十郎、抵抗を試みて立ち回るが取り押さえられ。

十郎 「畜生め！」

平太夫 「ええい、観念せい！この外道」

一市と十郎、前に投げ出される。

平太夫 「近頃、評判のはやり歌。広まる噂を捨て置けず、すでに調べを尽くした！この悪  
党め。出るわ出るわ、その方の悪行三昧、盗みに騙し、今でこそ正規の製法に変  
えた妙薬、天台鳥薬の裏からくりも当時の下働きの下人らがすべて吐きよった。

よくもお上を欺き、世間を騙し、いけしゃあしゃあと仏を語り説法を説いたもの  
よ。更には評判のはやり歌。いいや、知らぬとは申させぬ。作り元とされるその  
絵師をお上自ら屋敷に呼びつけ、洗いざらいを残らず聞いた。出世のために殺め  
た二名と火付けの一部始終。確かな口調で揺るぎのない様子。お上の名に泥塗り  
おつて。問答無用で成敗せよとのご命令。観念してそこになおれ」

一市 「いいえ。違うんです。とんだ間違いなのでございます！」

平太夫 「黙れ！黙れ」

一市 「すべてははかりごとなのです。(十郎を指差し)みんなこの悪党の仕業なのでござ  
います」

十郎 「兄貴！」

一市 「私も騙されておりました。私は何も知らないんでございます。此奴一人のたくら  
みで」

平太夫 「外道が。この場において、まだ」

一市 「いいえ、いいえ、本当なんです。みんな此奴の仕組んだ畏なんですよ」

十郎 「兄貴よう」

一市 「気安く声など掛けるんじゃない。この盗人め」

平太夫 「ヨシ秀殿、近う」

一市 「！」

座員たちの後ろからヨシ秀、登場。

ヨシ秀 「この男です。間違いありません」

一市 「声出ず」…」

ヨシ秀 「この男が源宋殺しを。女共々、地藏堂に火を放ち」

十郎 「(もがき暴れ) 手前か！あん時の河原者は」

ヨシ秀 「それ以前に、此奴は飢饉の村を捨て一人で逃げ出しました。雨を降らすと村人をたぶらかし、僅かな水を飲み干して。村の者は皆、死にました」

平太夫 「何とむごい。疑いもせず、すっかり信じて世話した我ら一同、口惜しゅうてならん。まさに仏の面をかぶった鬼畜そのもの」

ヨシ秀 「この男は皆を騙すのです」

一市 「…」

平太夫 「もはや知らぬと言ひ逃れできまい。我らを騙し、世間を騙し、よくも今までいけしやあしやあと。お上は怒っておられる。姫様は泣いておられる。覚悟せい！畜生の最期は畜生らしく、その首、洛中にさらしてくれる」

十郎 「離しやがれ！」

十郎、振りほどいて逃げていく。

ワツと、追いかける大半の座員たち。

十郎のみ、座長に制され、その場に残る。

十郎 『結局、アタシやこゝで終わり。すぐに裏手で捕えられ、その場で(手を首に当てる格好)。そりやもう痛かったの何の。兄貴よう！が、別れの言葉。(一市に)なあ、そうだよなあ』

一市 「顔をそむける」…」

十郎 『と、いう、てん末』

十郎、ポーズ。

座長に水筒を一つ渡され、静かに退場していく。

ヨシ秀、一市に近づき。

一市 「生きていたのか」

ヨシ秀 「そうとも。俺は見届けてやる。お前も。この世の最後も」

奥で座員たちの怒号が上がる。

ヨシ秀 「俺はな、村の最後も見届けた。みんな死んだよ。それはあまりに壮絶な。あまりに惨い」

一市 「…」

ヨシ秀 「僅かな水欲しさにその手に鋤、鎌を構え、隣の村を襲った姿。最後の最後まで、あの御方が舞い降りてくれることを信じて、それも叶わず返り討ちに合った姿。女子供も残らず頭を割られた姿。経を唱えながら人殺しに堕ちて死んでいった姿。俺は最後まで見届けた。それでもよ、とうとうあの御方は現れなかったぜ」

一市 「(苦しげに) ああ…」

ヨシ秀 「あの時ですら、あの御方はその姿を見せはしなかった」

一市 「分かっている…分かっているとも」

ヨシ秀 「俺は最後を見届けた。黙って。でも、あの御方は現れなかったぜ…最後までよ。

それが答えとお前は言った。お前は言ったな」

一市 「ああ…言ったとも」

ヨシ秀 「あの後、お前の屍に一部始終を伝えてやろうと、あの谷の祠へ登って行った。その後、自分も腹斬って、この世とおさらばするつもりで。何の未練もなかったかな、こんな世の中。そう思ってたどり着いたのだ。しかし、お前の姿はなかった」

一市 「(頷いている) ああ…」

ヨシ秀 「代わりに目に映ってきたのは、遠くに山を下って行く人影」

一市 「ああ…」

奥で座員たちが掛け声をあげる。

座員たちの声 「ヨイシヨッ！ヨイシヨッ！ヨイシヨッ！ヨイシヨッ！」

十郎の声 「兄貴よう！」

ヨシ秀 「見届けてやる。俺は見届けてやる。最後の最後まで」

座員たちの歓声が聞こえる。

平太夫、棒切れを持った座員を従え再び登場。

平太夫 「覚悟せい。次はお前だ」

座員、棒切れを振りかざす。

一市、渾身の力で振りほどき逃げる。

平太夫 「逃げたぞ。今度はこつちだ！捕えい。捕えい」

呼び笛、鳴り響く。

座員たち、怒号を上げて舞台を横断していく。

その後をヨシ秀、退場。

座長、再び一市を制して、牢に戻す。

遠くで怒号の嵐、尚も聞こえて。

照明、CHANGE。

### ○見世物小屋

一市、うずくまって震えている。

座長 「おかしいと思ったことは」

一市 「もう…いい…」

座長 「おかしいとは思わなかった。どうしてあの御方は助けられないのか」

一市 「もう…いい」

座長 「慕って。恋い焦がれ。生涯、想い続けて。それなのに」

一市 「もう…いい」

座長 「未だに会ったこともなく。姿すらない。一度も」

一市 「もう…いい」

座長 「おかしいとは思わなかった。本当に」

一市 「もういい！もう我慢ならない。私はこのしりと屈辱に耐えてここまでやってきた。しかし、見てみる。とうとう人殺しの人非人に仕立て上げられてしまった。極悪非道のろくでなしに。もういい！これ以上は耐えられぬ。お前たちは、あまりにも汚れ、どうしようもなく醜い。やはりここは地獄の底。ああ、私は死力を尽くした。尽くしたけれども届かなかった。しかし、もういい。これ以上はもう我慢がならない。きつとあの御方もお分かり頂けるはず。(天を仰ぎ)お許しくださいませね。くださいますよね」

一市、袋を取り出す。

座長 「おやおや。何やら」

一市 「私がおこへ来る時に、あの御方の使いから託された品」

座長 「その小袋が」

一市 「中にそれは尊い仏様の像が入っている。近づくんじゃない。金だ。金で出来てる。ここから放つ光こそ、極楽へ導く掛け替えのない道しるべ。これこそが、あの御方との約束の絆」

座長 「どうです。ここへ来て尚、粘りを見せようと致します」

一市 「これこそが、あの御方の信頼の証」

座長 「(鞭)さあ、盛り上がってやってください。この袋に輝く未来が。最後のあがきとなりませんか」

一市 「お前たちにはね、分からないのだよ。尊い絆と輝く未来いうものが。信頼と情熱の架け橋というものがね。繋がっているのだよ、あの御方と私はね。たとえ遙か天と地と離れていたとしても永遠に。私はもう帰る。もと来た所へ今すぐ帰る」

座長 「いいだろう。それならかざして御覧な。これだけの前ならば、まさか見間違いも起こるまい」

一市 「ああ。開けてやる！開けてやるとも！よく見ておくがいい」

座長 「皆様、ようくご覧あれ」

一市 「光で目をつぶすな。これが私とあの御方の」

一市、巾着の中身を取り出す。

袋の中から出てくる石の塊。

激しく鳴り響く太鼓。

座長 「(鞭)ただの石コロでございーます」

座長、大袈裟に腹をよじらんばかりに笑っている。

一市 「まさか…どうなってる…これは」

座長 「こいつはいい。これが尊い絆。こいつが輝く未来」

一市 「そんな…そんなはずは…どうしたというのだ」

座長 「情熱の架け橋。永遠のつながり」

一市 「そんな…そんな…」

座長 「どうだい。これだけの見ている前だ。もはや言い逃れなど」

一市 「いや、しかし…私は…私は本当に」

座長 「もう聞き飽きたよ。お前さんの本当には」

太鼓と歓声。

一市 「馬鹿な：馬鹿な：」

座長 「おかしいと思つたことは」

一市 「(頭を振る) …」

座長 「おかしいと思わなかつた。どうしてあの御方を見たことがないのか」

一市 「(頭を振る) …」

座長 「これだけ慕つて。恋い焦がれ。生涯、想い続けて。それなのに…。未だに会つたことがない。姿すらない。一度も…。おかしいとは思わなかつた。おかしいとは」

一市、崩れるようにひざをつく。

座長 「負けを認めた！」

太鼓、一気に盛り上がる。

太鼓の音がリズムカルに打ちはじめ。

座長 「(鞭)とうとう方がつきました！さあ、これにて一巻の終わり。悪あがきも出尽くしました。(鞭)我らの予想をはるかに超えて、様々な言い逃れを続けて参りましたが、今回の代物もまた観念をば致しました。これもひとえに皆様のご支援あつての賜物。(鞭)長のお付き合いを頂戴いたしましたがお慰みとなりましたでしょうか。(鞭)さあ、さあ、一座は新たな顔ぶれを引き連れて、またもや必ずお目見え致します。それでは皆々様、よしなに。どうぞよしなに。極楽から来た坊主！  
終幕。終幕—！(鞭)」

座長、深々とお辞儀。

暗転。

太鼓の音、OUT。

溶明。

先ほどと同じ場所に一市、浮かび上がる。

一市 「すべてが終わつてしまつたのでございます…。途方に暮れておりました。私は一人の男を犍陀多という男を探すことも出来ず、ただただ謂れない辱めを受けて、帰る手立てさえ失つたのでございます。見世物は終わり、鬼たちは方々に散つていきます。私は、虚しく一人取り残されて、その身をさらしております。これから一体、どうすればよいのか、その考えも浮かんで参りもせず」

清らかな顔立ちと、恵まれた容姿の青年、登場。

青年 「ああ、とうとう出会えた。出会うことが出来た。私はこの日をどれほど待ち望んだことか。この日をどれほど夢見たことか。見てください。僕を見てください。お分かりになりますか」

一市 「誰…」

青年 「僕は嬉しい。本当に嬉しいんですよ。僕はあの時あなたのくださったあの施しを、片時も忘れたことはありません」

一市 「施し…」

青年 「そうです。生涯で最後の贅沢を、あなたに与えていただきました。あの時の一杯

の水。僅かばかりの水だったけれど、生涯であれほど幸福を味わったことは。僕が生きていた世界で、一番の潤いの記憶はあなたからのあの水なのです。僕はあの時のご恩をずっと胸に抱いて」

一市 「お前は…」

青年 「まだお分かりになりませんか」

一市 「まさか。あの時の…あの村の」

青年 「そうです。ハルです。あの時の」

一市 「ハル坊…」

青年 「よかった。本当によかった。とうとうお会い出来ました。見てください。こんなに大きくなりました」

ビリー、登場。

ビリー 「お元氣そうじゃありませんか」

一市 「(気づく) 貴様！」

ビリー 「おotto。そんなに興奮しちゃいけません」

一市 「よくもこんなひどい目に」

ビリー 「だからこうして。ほら、ね」

ビリー、アゴを動かし、青年をさす。

青年 「お坊さん」

一市 「(その意味を悟り) 貴様という奴は」

ビリー 「お分かりじゃありませんか」

青年 「本当に嬉しい。私はあなたと再び出会える日を、どれ程待ち望んでいたことか」

ビリー 「どうです。そんな所からではよく話も出来やしない。中に入って御覧になっちゃ」

青年 「いいんですか」

ビリー 「雑作もない」

一市、じっとビリーを見つめている。

ビリー 「さ。お入んなさい」

ビリー、青年を中へ入れてやる。

青年 「ああ、懐かしい。とうとう出会えた。僕は今日という日を夢見ながら待ち続けてきたのです」

一市 「(憎々しげにビリーの側に走り) 私にどうしろと」

ビリー 「お急ぎなさい。牢の開け閉めは今回一度きり。その約束で、一寸の間、座長から目を離してもらっているんですから。分かりますね。これが最初で最後です」

一市 「(後ずさる) 最後…」

ビリー 「残ったっていいんだ。そちらを選択すれば一日僅かな混ざり水にはありつけます」

一市 「しかし…この子は」

ビリー 「(屈託なく笑い) いけないんだ。知っていながらそんなこと」

一市 「畜生…」

青年 「お坊さん、どうされました。さあ、私を見てください。私はこんなに元気に…」

ビリー 「どうするんだい。アタシはどちらでもいいんだよ」

一市 「お前たちは畜生だ。本当の畜生だ」



一市、素早く牢から出る。  
ビリー、牢を閉める。

青年 「どちらへ」

一市 「(声を背中で聞いている) …」

ビリー 「さようなら。(♪ふざけた調子で) これでお別れだ」

青年 「何の真似です。私をここから出して下さい」

一市 「…」

笛の音、殴りこむ。

青年 「お坊さん！」

ビリー 「お行きなさい」

一市、背を向け駆け出していく。

青年 「お坊さん！お坊さん！お坊さん！」

ビリー、高らかに笑い、一市に手を振る。

座長、登場。

座長 「(鞭) 紳士淑女の皆様方！さあさ、お立会いだよ！装いも新たに新作のお目見えだ。これに控えます青年。整いましたる姿形とは裏腹に、幼少のころより人様をたぶらかし、貴重な水や食料をだまし取ってきた人たらし。その鮮やかなやり口に、まんまと引つかかった大人は数知れず。これより先はじっくりと、あらいざらいを暴いて参ります」

座長、ポーズを作り、鞭を鳴らしている。

ビリー、手を振り続けて。

笛の音、鳴り響く。

暗転。

## ○山中

笛の音、呼び笛に変化していく。

♪みやれ みやれ

ほとけの 面した おーには

お堂の ころし

火をうち にげる

もとは 日照りの 泣き仙人

むらびと みすてた ぼうず」

溶明。

牢屋の棒はなくなっている。

一市、肩で息をして駆け込み、地面に崩れ落ちる。

一市 「もういけない。これ以上は走れやしない」

聞こえてくる呼び笛の音。

一市 「追っ手の数があれほどまで際限なく増えて。ここまでか…。このなりを見よ。何というさま。これが昨日まで欲しいままに栄華を誇ったやんごとなき位の姿か。

この世の華を知らぬ身より、知って転び墮ちる口惜しさ。ただ墮ちるより倍、思い知らされる。(天を仰ぎ) どうだ。良いさまか。散々に翻弄し尽くしたあげく、生かすも殺すも意のままか。己になびかぬ叛逆者一人もてあそぶくらいとも容易いか。掌の中でちっぽけな人間たちをまどわせ喜ぶ魔性の主め。さぞや楽しかるう…さぞや」

呼び笛の音、遠のいていく。

一市 「(ご)ろりと仰向けとなり) 死ぬるか…。とうとうし尽くした夢の最後よ。どうせ一度は命捨てた身。都巡りなど遠回りしただけ。いや、よくよく考えて見れば、所詮は誰もが、遠回りしながら一つ所に向こうでいるだけのこと。ふん…今更、分かってみたとこで何になる。残りもわずか。あとは静かに…静かに。(背中に違和感) 何だ。何か動いた…！」

一市、がばと身を起こし地面を見やる。

間。

一市 「蜘蛛か…」

一市、掌に蜘蛛を乗せる。

一市 「ふん、お前のような畜生でも命あるものには変わりない。いつもならためらわず始末をつけるところだが、今日という日は殺生する気も起こらぬ。運のいい奴。命拾いをしたな。今度ばかりは、その身、踏みつけるは見逃してやる。行け、行け行け。次見て、この気の変わらぬうちに」

奥へ蜘蛛を投げ、逃がしてやる。

一市 「(嘖きこぼれる笑い) これはどうだ…私も運命をつかさどる真似事をした。慈悲深い天界の光さながら、地をほう盲目の畜生が私の考えひとつで救われて行ったぞ。馬鹿馬鹿しい。所詮、運命とはこのようなもの。別段、理由もないただの偶然の交差。おおい！これはこの世の縮図か。返事してみよ。己を映す鏡、わざと見せたか。(やがて笑いが消えて) おおい！いるのかいないのか。人の人生、どこまで翻弄する。ここまで来ても尚、けしかけ高みで笑うか。それとも、ただの物言わぬ空に話しかけているのか、私は」

起き上がっていく。

一市 「よし、上等！こうなれば、生き抜いて見せてやるとも。逆風の生涯にさらされひねくれたこの私が苦悩の末にこうべを垂れ、涙のひとつも流すとも思ってたか。夜も近い。まだ術はある。この山越えさえすれば。ひとまず追っ手を目くらまし、国を変え、名を変え、素性を変えて。いずれほとぼり冷めるのを待てば。それもそう遠い夢でもあるまい。見るがいい。こんな姿に成り果ても尚、人間にはどこからと知れずあふれ出る、望みというものを生みつづけていくのだ。これこそが人間の性。誰にも手出しのできない、人間だけの命の火。人間の最も根底にある力。この火を消すことなど誰にも出来ぬ。天命など握りつぶしてやる。この身の運命、己で変えてやるとも」

行こうとする出会いがしらに検非違使たち、登場。

すぐさま呼び笛で周囲に知らせ、散っていく。

一市、力なく突っ伏していく。

再び、吹きこぼれる笑い。  
やがて咳き込み出す。  
呼び笛の音、鳴り響いている。  
照明、CHANGE。

○壊れた扉前

聞こえてくる声。

地獄の住人たち、姿を現す。

老人と労働者が中央の穴から出てくる。

「ノド…ノド…ノドの渴きをうるおせ！」

干からびた この渴きを

しわがれた砂の体を

ミズ…ミズ…ミズをこの手で飲ませろ

ひとすくい いやひと海

いくらあっても足らねえ

根こそぎ飲んで飲み干せ

(俺は千年見ちゃいねえ)

ノド…ノド…ノドの渴きをうるおせ

干からびた この渴きを

しわがれた砂の体を

ミズ…ミズ…ミズをこの手で飲ませろ

ひとすくい いやひと海

ノド…ノド…ノドの渴きをうるおせ

ノド…ノド…ノドの渴きをうるおせ

住人たち、穴を掘っていく。

一市、咳き込み続けている。

一市 「水を…。水をくれ…。喉が渴いて…死にそうなのだ」

老人 「水などないよ」

労働者 「水はない」

住人1 「ここは渴きで覆われた世界」

住人2 「ひどくね」

住人3 「カラカラにね」

住人4 「皆が澄んだ真水を探し続ける」

住人5 「果てしなく。ずっと」

一市 「ああ…」

数学者「(地面に数式を書いている)いけない！そこんところを踏んじや、折角の数式が消えてしまう。今、一〇七次元まで来たんだから」

老人 「あんたも手伝え。出たら少し分けてやる」  
労働者 「こうやって地面を起こしていくと、ほんの少し出ることがある」  
老人 「ごく稀にね」  
労働者 「どこかにはあるはずなんだから」  
老人 「そう。ないわけないんだから」  
一市 「頼む…今すぐ水を…。水を…」  
数学者 「大事な所なんだからね。無限に広がっていた数式が、みんな元のゼロに向かっていく」  
老人 「待ってたって来ないぜ。どこからも」  
労働者 「誰からも」  
老人 「いくら待ったところで、待たされるだけ」  
労働者 「あんただって待ったろ。けれど、とうとう来なかった」  
老人 「そうさ。来なかった」  
労働者 「ただ待たされただけで」  
老人 「そうして一生が終わった」  
数学者 「元のゼロに向かっていく」  
労働者 「あんたも手伝え。どこかにはあるはずなんだから」  
老人 「そう。ないわけないんだから」  
一市 「ああ…」  
住人1 「おい、これ見ろ！」  
住人2 「出たか」  
住人3 「出たぞ！」  
住人4 「本当だ。出た、出た」  
一市 「出たのか！」  
老人 「いや待て」  
労働者 「よく見ろ。この色！」  
一市 「ああ…」  
老人 「毒だ。今度も」  
住人1 「また娑婆で誰かが」  
住人2 「何だ、またありつけねえ」  
一市 「本当か…本当に毒か」  
老人 「見ろよ、こんなにどす黒く濁って」  
住人3 「憎しみか。嘆きか。それとも怒りか」  
老人 「戦争だな。こいつはすごい悲しみの量だ」  
住人4 「ああ…」  
住人5 「人間という奴は…」  
労働者 「馬鹿野郎。人間の馬鹿野郎。お前たちはいつになったら」  
一市 「間違いないのか…本当に飲めないのか」  
老人 「近づくな。これに触れちゃお終いよ。行こう。ここも当分、近寄れやしない」

一市 「しかし…私は喉が渴いて…これ以上、耐えられんのだ」

住人1 「おい」

住人2 「おいおい…こいつ行く気じゃねえか」

住人3 「誰か…そいつを押さえつけろ」

住人4 「止めろ！正気を取り戻せ」

住人5 「ダメだ。知らねえぞ、俺は！」

労働者 「こいつはえらいことに！」

老人 「ああ！とうとう、この男も」

一市 「私はもう…これ以上もう…」

太鼓の音、IN。

一市、掘った穴に顔を入れる。

照明、CHANGE。

一市、一気に苦しみもがく動きを見せる。

逃げ惑う住人たち。

鬼の鳴き声、轟く。

## ○土壇場

太鼓の音、低くリズムカルに続いている。

転んだままの一市の姿。

珍念と黙念、首斬り役人たちに後ろ手を縛られ連れて来られる。

珍念 「ひええ。ひええ。お助けくださいまし」

黙念 「どうして私たちが巻き添えに」

珍念 「私たちが何を、何をしたと」

黙念 「こんな男とは一切、関わりが」

珍念 「殺しの算段など滅相もない」

黙念 「ましてや火つけの相談など」

珍念 「もしやこの男だけは裏で手を引いていた疑いも」

黙念 「何を言うか。お前こそ知恵のまわる悪だくみを」

珍念 「何をぬかしやがる」

黙念 「黙れ、畜生」

珍念 「薄汚い猿め」

黙念 「生臭の面汚し」

珍念 「お慈悲です。後生ですから、もう一度」

黙念 「もう一度、お調べを」

泣き叫びながら、奥の通路へ上げられる。

奥を向いたまま両膝をつかさされる。

討ち首の準備が進められていく。

一市 「泣いてわめくな！」

黙念と珍念、泣き止まず。

一市 「所詮、この世は通り過ぎるだけの夢か幻。手に触れるものなど本当は何ひとつなかった。すべてが無常、すべてが空。いいだろう。ここまでは經典の説く世界そのままに。しかし、ここから。肝心なのはここから先さ」

黙念と珍念 「ひええ。ひええ」

一市 「泣いてわめくなというのに！」

周囲から群衆の声、聞こえる。

声 「ヨイシヨツ！ヨイシヨツ！ヨイシヨツ！」

首斬り役人1が棒切れを振り下ろす格好。

黙念と珍念、順に通路の奥へ落ちていく。

首斬り役人2、一市を連れて上がる。

一市 「散々、もてあそばれた末、いよいよこの時が来た。とうに覚悟は決まっている。いいか、とくと見てやる。たった一度きり、己のこの首はねられた後の世界があるのかないのか。最期にこの目で確かめてやる。ヨシ秀よ！ヨシ秀！どこにいる。今こそ明らかにしてやる。討たれた瞬間、無となって暗闇のまま終いになるか。それとも迎えが現れ、光が差すか。お前に伝える術はあるまいが、見ておれ、ヨシ秀！お前の望み通り、とうとうこの瞬間が。いいか、見ておれよ」

一市、押さえつけられ正面を向き、真っ直ぐに目を見開く。

周囲から群衆の声。

声 「ヨイシヨツ！ヨイシヨツ！ヨイシヨツ！」

役人が棒切れを振り下ろす格好。

太鼓の音、STOP。

暗転。

## ○白の世界

溶明。

静寂に一市、目覚める。

辺りを見回すが誰もいない。

鳥の鳴き声のような優しい笛の音。

一市 「鳳凰？」

静かに太鼓の音。

一市 「風に揺れるあの木々は…沙羅双樹」

立ち上がり、暫し間。

鳳凰の鳴き声、更に高まり。

一市、周りを見渡す。

一市 「私は一度…ここへ来た。いや、何度も何度も」

蜘蛛、登場している。

糸紡ぎを始めだす。

一市 「(気づき)…誰」

蜘蛛 「蜘蛛です。銀の糸を出すあの蜘蛛です」

一市 「ここには長く」  
蜘蛛 「そう、暫くになります」  
一市 「そういえば：私はいつかお前と会った」  
蜘蛛 「何です」  
一市 「一寸、聞きたいのだがね。この景色からみて、間違いようもないのだけれどね」  
蜘蛛 「ええ」  
一市 「天上だね、ここは。つまり極楽の」  
蜘蛛 「いいえ。ここは天上ではありません。極楽なんかじゃ」  
一市 「そう：前にもいつか、こんな話を」  
蜘蛛 「極楽なんかじゃありません。まだ」  
一市 「だって、お前！あれは、沙羅双樹：それに鳳凰じゃないか」  
蜘蛛 「見えますか」  
一市 「見えます」  
蜘蛛 「どこに」  
一市 「だから、ほら、あそこ：」  
蜘蛛 「いいえ：あれは、あなた」

照明、CHANGE。

聞こえてくる般若心経の響き。

紗の奥から源宋と恵蓮、登場。

蔽かな光に包まれている。

源宋 「御仏を見たよ」  
一市 「源宋様」  
源宋 「あの御方を見た。突然だったがお会いした」  
一市 「まさか」  
源宋 「それは美しい姿形をしておられ」  
恵蓮 「ええ。私も見た」  
一市 「喋った：」  
恵蓮 「私も見たわ、あの御方を。それは綺麗なお姿で。それはおごそかな物言いをされて」  
源宋 「会ったのだよ。初めは信じられなかったがね。確かにあの御方は」  
一市 「嘘だ：。あの御方のことはあなただって」  
源宋 「それでもね、会ったんだよ。あの御方、ちっとも怒っちゃいなかった」  
恵蓮 「とても静かにお話を聞いてくださった。私はみんな話したよ」  
一市 「みんな：」  
恵蓮 「そう、みんな。自分のこと、うちの人のこと：あんたのこと」  
一市 「(近づいていく) 私の：こと」  
一市 「あなたの足が動かなくなる。」  
蜘蛛 「あなたにはまだ行くことが出来ません」  
一市 「何だ。どうなってる：！」  
恵蓮 「私はみんな話したよ」

一市 「動かない…この足、動かない」

惠蓮 「あんたが私にしたことも。あんたに殺されたことも」

源宋 「あの御方はちゃんと知っている様子だったがね。それは大変、お嘆きになって」

読経の響き、大きくなり。

その声が一市には苦しい様子。

一市 「源宋様！お師匠様！」

源宋、惠蓮の姿、消えていく。

入れ替わるように奥から亡者の群れ。

手に一本一本のヒモを持ち、うごめきながら一市の体に巻き付けていく。

黙念と珍念、群れの前方に現れる。

黙念 「あなた酷いじゃありませんか。よくも私たちをこんな目に」

珍念 「私たちはね、あなたと関わったばかりに」

一市、苦しげに追い払う格好。

一市 「あっちへ行け。私にまとわりつくな」

村人たちが一市の周囲を彷徨う。

長老 「あなた、どうなってるんです」

タロー 「浄土の水なんてどこにもありませんよ。どこにも」

ジロー 「一切から解き放たれるなんて、あれは」

アリオ 「どうすればいいのか。苦しみが未だに続いているんです。いつまでも続くんです」

ハル坊の母 「どこですあの子は。探し回っているのに、ちっとも見当たらないんです」

一市 「苦しげに追い払い）私に言うなというのに」

黙念 「どうしてくれる」

珍念 「みんな、あなたのせいなんだ」

一市 「お師匠様！」

亡者の群れが波のごとく一市の周りを取り囲む。

一市、苦しんで。

読経の声、止む。

暗転。

### ○壊れた扉前

照明、薄暗い。

一市、気がつくくと、うごめく亡者の中で正気に戻っている。

絡んだ糸は縦横無尽に広がり、もはや蜘蛛の巣の様相。

その中心に一市がいる。

一市 「ああ、何ということだ…。私は初めからここにいたのだ。どこにも行ってなごい

なかつた…。地獄の血の池の淵でもがきあがいていただけなのだ。何という…。ぶざ

まな。(転げ回り) ああ、喉が渇く…喉が」

亡者の群れ、地を這い、うごめいている。

一市 「(天を仰ぎ) 見ろ！この姿を。これこそが真の世界の姿だ。渇きに苦しみ、血を啜



り、もがいて終える無意味な世界よ。長い長い時をかけたところで人間の本性など変わりはない。あなたはとうとう創れなかった、安らぎの世界など！善に満ちた慈愛の国など！尊い言葉を並べた経典をいかに振りかざして説き伏せても、ついに創れはしなかったのだ。すべてが解放される世界などどこにもなかった。どこにも！」

一市、苦しげに大きく頭を振り。

一市 「ああ：そうではない！。私は気づいているのだ！私は：私は未だに信じている：あなたのことを！あなたの存在を！こんなに裏切られても：答えをよこさず沈黙を続けられても：それでも。ああ！私の生涯というものは、たった一度でいい：あなたをこの目で、この身体で、確かに感じる、ただそれだけが望みの：それに尽きる人生だった。生涯すべてがその思いに突き動かされ：。あの夏の日に賭けたの最後の思い。たった一言でいい。私は応えて欲しかった。ああ！あれだけ背を向けられてもまだ、私は心の底で待ち望んでいる。そうとも。そのことに私はいつも気がついていた。聞こえていますか！一度は抱いた疑惑の影に生涯おびえながら、それでも私は想っていた。あなたのことを。あなたの御姿を。あなたの存在にすがり、あなたの説いた浄土の世界に救いを求めていたのです。一度でいい：私の目の前に現れて欲しい。そうすれば：そうすれば、皆、あなたの教えた理想の世界が、この世のどこかにあると信じて生きていけるのです」

一市、泣き崩れて。

突如として稲光。

天女のコーラス、殴り込む。

雨が降ってきた様子。

亡者の群れ、驚きの声を上げている。

一市 「雨：！雨だ。汚れを打ち消す救いの雨が。どうだ！とうとう私は！降り！降り！雨よ！この毒、洗い流してみせよ」

うごめく亡者の群れ。

一市 「蜘蛛よ！聞こえるか蜘蛛よ！もう十分だろう！今こそお前に渾身の力を込めて私は声を響かせる！蜘蛛よ、この身を帰せ！あの極楽の元へ。まばゆいばかりの三千世界。蜘蛛よ！お前と交わした約束、私は忘れはしない。この声光の国へ、届けよ蜘蛛よ！銀の糸を下ろせよ蜘蛛よ！聞こえるだろう！この声、届けよ蜘蛛よ」

天女のコーラス、最高潮に。

天から下りてくる長い銀色の縄梯子。

驚嘆する亡者たち。

一市、糸につかまり登っていく。

一市 「蜘蛛よ！私は分かっていた！すべて分かっていた！お前の下ろすこの糸が、光の国へ導くことを！蜘蛛よ！上げろよ蜘蛛よ！このまま上げて元へと帰せ！極楽の！蓮の池！賢者の森の！慈しみの世界へ！蜘蛛よ！上げろよ蜘蛛よ！」

一市、ゆっくりと登っていく。

奥の通路からヨシ秀、登場。

縄梯子に飛びつき、一市より先に登って行く。

一市 「ヨシ秀！」

ヨシ秀 「見届けてやる！俺は見届けてやるぞ！」

ヨシ秀、登って見えなくなる。

一市 「ヨシ秀！ヨシ秀え！」

地を這う亡者たち、後に続いて縄梯子につかまり出している。

一市、それに気がつく。

一切の音、一瞬にしてSTOP。

一市 「お前たち！そんなにつかまっては糸が切れてしまう！下りろ！下りろ！これは私の！私のモノだ！」

皆が一斉に一市を見る。

急激なる暗転。

ごとと、吹く風の音、虚しく響いて…。

溶明。

途中で切れた銀の縄梯子。

ふらふらと風に煽られ揺れている。

一市、足を引きずり、登場。

一市

「ここに堕ちてしばらくになりますが、未だこうして地の底におります。

毎日が行く末不確か、悲しみと虚しさに満ち溢れ、ただただ彷徨うばかりにございます。潤いの雨は一瞬の通り雨で終わりました。あれだけ長きに待ち続け、ようやく舌の上に乗せることの出来た麗しの真水は、ほんの僅かの間に枯れて、喉を潤すにも至りません。次あるのはいつの日のことか。遠い幻を待つ心持ちにございます。

あれからというものの、こうして天を仰ぎます。慈悲の雨さえ降らさぬ分厚い雲は光らしい光を射すこともなく、日々、暗い影と渴きを与えるばかり。どれくらいの時が過ぎたのでしょうか。何百年、ともすると千年にも感じます。

ヨシ秀はどこへ行ったのか。源宋様とお会いしたのもあの時きりです。韃陀多は未だに見つかりません。これだけ探してみても、どこにいるのか。いたずらに時ばかりが過ぎ、来る日も来る日もこの荒れ地をうろつくばかり。手がかりひとつございません。

極楽にいた日々が幻のように感じます。目を閉じると、まるで昨日のことのように浮かんでくるあの甘美の景色。ああ…あの鳥のさえずり、そよぐ風音、かぐわしい花の香がありありと。天女の声は美しく響き、清らかな水辺の面は静清と蓮の花を咲かせている。あの御方は今頃どうしておられるのでしょうか。極楽では、そろそろ午になったあたりでございませうか」

一市、足を引きずり去っていく。

舞台奥、ヨシ秀が走り来る。  
背中を向けたその奥に大きな門が見える。  
門が開き、光溢れている。  
ヨシ秀、光の中へ入っていく。  
門は締まり、赤ん坊の産声が聞こえる。  
やがて地獄の世界だけが残り。  
銀の縄梯子は、いつまでも風に揺れている。  
ぶらりぶらりと…。

(since 2013)